
白道寺 (霊界ゲリラ隊)

ジッテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白道寺（霊界ゲリラ隊）

【Nコード】

N8802F

【作者名】

ジッテル

【あらすじ】

わたしの意識が霊界の住人の意識に入り込んで次元を超えて一緒に追体験して行く物語です。

第1話 夏休み（前書き）

突然私の意識の中に出て来て、それを書き留めた物語ですので私にもストーリーがどのように展開して行くのかわかりません。

途中で残酷な表現などが出て来てしまう恐れがあるかもしれませんが
ので

ご注意ください。

（ただいま第1話から順番にストーリーの編集をしております。

ストーリーが変化してしまったところもあります。

サブタイトルも変わるところもあります。

未編集のものは削除しました。

しばらくかかりますがよろしくお願いいたします。）

第1話 夏休み

白道寺 (霊界ゲリラ隊)

ジ

ツテル

私は南に向いている

二階の窓を開けると、

無意識に胸いっぱい

深く息を吸いこんだ。

すがすがしい緑の田畑と

青い山脈が全体に広がって、

開けた景色のなかに

輝いている。

明るいひかりに満ちあふれ、

爽やかなそよ風が

心地よく頬を撫でて行く。

心が開放された

楽しい夏休みだ。

小学校五年生の私は

昼食を済ませると、

半ズボンに半袖シャツと

麦わら帽子で

おもてへ飛び出した。

ジリジリ

肌が焼ける

太陽のひかりに地面から、

もわっと

熱い湿気が立ち登ってくる。

真ん中に雑草の生えている細い道は

リヤカーの通ったあとが

轍わだちになって、

桑畑の日陰のところに

昨夜の雨が乾かずに

溜まっていた。

私はぬかっている水溜まりに

注意しながら、

その先のスイカ畑を抜けて、

用水路の小さい橋を渡ると、

草が根を張っている

田んぼのあぜみちに出た。

そこを抜けて

しばらく

歩いて行くと、

幅三メートルくらいの

小川に突き当たった。

そこから

その小川に沿った

細い道を右に曲がって、

立ち止まると、

いつも遊んでいる小川に

挨拶するように

覗き込んだ。

この時期の

量が多く流れの速い水は

生き生きと

穏やかな水音をたてている。

相変わらず

たくさんの田螺たじが

いたるところにいて、

澄んで透明な川底に

根をはった水草が水の流れに、

ゆらゆら揺れて、

ゲンゴロウが

それに

しがみついているのが見える。

ミズスマシが音もなく

水面を滑^{すべ}って、

黒い小さな魚が

驚いたように

草の影に姿を消した。

さまざまな命に

あふれている川の中は

ワクワクする魅力に

満ちていた。

川岸の草むらには

地味な茶色のアブが

気配を消すように、

どこを見ているのかわからない

とぼけた眼で、

草の葉の陰から

こちらをうかがっている。

気が付かなければ、

後ろに回って

襲って来るつもりなのだろう。

それを

油断なく

横目で威圧しながら、

また急ぎ足で歩きだした。

だんだん

山の森が近付いて来て、

いよいよ

鬱蒼うっそうと木が生い茂った

小高い山の道にさしかかった。

木の枝が覆いかぶさって

直射日光が遮られ、

暑さが和らいで

涼しさを感じる。

クロアゲハが

大きくひろげられた見事な蜘蛛の巣を

よけながら、

静かに羽ばたいて

道を横切って行った。

真ん中で

じっとしている

蜘蛛の眼が心なしか、

悔しそうに

その動きを

追っているように

感じられた。

山道をそのまま進んで行くと、

まもなく、

大きな木のところに

たどり着いた。

見ると

運動靴に青い半ズボン、

白いシャツ、

坊主頭の

少年が太い木の根元から

上のほうを

ジッと

見てなにかを探しているようだった。

「しゅうちゃん、

なにしてるの。」

私は声をかけた。

しゅう君はこちらを見て、

また木の上に目をやった。

「見たんだ。」

「なにを。」

「羽根生えてる人。」

「まさか、

そんなのいるわけないよ。」

「本当だよ。」

スーッ

て上へ上がって行ったんだ。」

「えーっ、

そんなことってあるのかな。」

ビッシリと

葉の生おい茂しげって

交錯しりぞくした

枝の間を探しながら、

ぐるりと

木の周りを回って見たが、

蝉せみとカブト虫とコガネムシが

太い幹の樹液にへばり付き、

蟻が走り回っているだけで、

あとは

ただ木の葉が

そよ風に揺れているだけだった。

「だれもいないよ」

私が言った。

「だけど、

たしかに見たんだけどな！」

しゅうちゃんは心残りのように

溜^ため息をついた。

「しゅうちゃん、

不動堂の探検に

行くんじゃないかったんだっけ。」

気を取り直して、

私は声をかけた。

「うん」

しゅうちゃんは

まだ先ほどの羽根のはえた人が

気になっているらしく、

ちらつと

大木の上のほうを向いてから

踵かかとを返した。

「こっちから行ったほうが早いよ。」

しゅう君が笹をかきわけながら

斜面を登り始めた。

私も笹や草を掻き分け、

生えている木々のあいだを

縫うように登り始めた。

まるで忍者だ。

私は途端に

黒ずくめの服を着て、

忍法を使って

飛ぶように

スイスイ斜面を走って行く

空想にどっぴり埋没して、

ときどき

どこからともなく

飛んでくる手裏剣や

私を狙^おって

斬り込んでくる刀を

次々はね返して、

相手をすはやく

斬り倒していた。

しばらくのあいだ

敵の攻撃をかわしながら、

煙幕爆弾を投げつけ

姿をくらまして

天才忍者が進んで行くと、

よじぢやく

頂上の平坦な場所に出た。

そこは先程の場所から

山道を遠回りするよつに

歩いて行くと、

ここに来るのだ。

見ると、

所々破けたように

木が抜けている

荒れた生け垣がきになっている。

「あつ、

お寺の裏だ。

ここに出て来るのか。」

しゅーちゃんはよく知ってるな、

と思いながら

生け垣に近付いて行くと、

しゅー君は迷わず

その隙間すきまから

中へ姿を消した。

中に入ると竹藪が、

入って来る者を拒むように

大量の竹を生やしている。

竹に行く手を

さえぎられながら

体をくねらせて

抜けて行くと、

草がボウボウに

生い茂っていて、

古く風化した墓石が

林立しているところへ出て、

やっと

煩^{わづ}わしさから

開放された。

夏の日差しに

草の匂^むいが蒸^むれて、

虫達がブンブン飛びかい

あぶら蝉の音が

うるさいほど

降^ふっていて、

藪蚊^{よっしや}が容赦なく

血を吸いに襲^襲って来る。

そこから

表のほうへ回っていった。

だれも手入れをしていないようで、

荒れ放題になっている。

そして

そこには

草に埋まるように

本堂が建っていた。

私はあたりを見回してから、

回廊かいろうに上がって行く

階段を登って

中を覗いた。のぞ

しかし

薄暗い中に

不動明王らしい仏像が

安置あんちしてあるようだが、

どのようなものか

はっきりとは

わからなかった。

開けてみれば

はっきり見えるに

ちがない。

正面の開き戸の前に立って

開けてみようと

力を入れたが

鍵が掛^かかっていて

びくともしなかった。

「いつちゃん、

そっちらは入れないよ」

しゅう君が

後ろから声をかけた。

第2話 お寺（前書き）

編集済みです。

第2話 お寺

回廊かいろうを降りると

しゅう君が床下を指さした。

「この下から入れるよ」

回廊の下を

太陽が照り付け、

土がサラサラに

乾いていて、

すり鉢のような

蟻地獄あらしじごくの巣が

無数に出来ている。

巣穴に落ちて、

もがいている蟻が

ザラザラと

崩れる斜面を

必死に登ろうとしていると、

突然

二つのツノのようなものが

すり鉢の底から

現れたかと思つた瞬間、

蟻を挟んで

乾いた土の中へ引きずりこむと

気配を消した。

床下の奥は真っ暗で

入り口近くにある土台の柱が

並んでいるのが見える。

しゅう君が体を低くして

ずんずん

中へ入って行く。

私は

何か出て来そうな恐怖を

感じて

躊躇^{ちゅう}していたが、

意を決して入っていった。

蜘蛛の巣が

絡^{から}み付いてきて

なんとも煩^{わづ}わしい。

カビとほこりのにおいで

空気が澱^{よど}んでいる。

夏の強い日差しになれていた眼が

徐々に

暗闇に順応してくると、

あたりの様子が

わかるようになってきた。

奥のほうまで

入って行った

しゅう君の姿が

忽然とかき消えた。

「あれ！」

頭をぶつけないように

あとを追って行くと、

しゅう君が消えたあたりで

床が抜けていて、

中へ入れるようになっていた。

恐る恐る

頭を穴から出して

気配をつかがってから、

そおっと

腕で体を押し上げて

中に入ると、

すべてがほこりにまみれていて

人の気配が無かった。

しゅう君はどこに行ってしまったのか。

「しゅうちゃん！」

そっと

遠慮がちに呼んでみたが、

あたりは静まり返って

だれもいない。

心細さに、

あたりをみまわして、

どこかに

人が行ける場所があるのか

探してみた。

須弥壇しゅみだんの上には

大きな大日如来と

不動明王が安置してあって、

その前に

破けた太鼓と

護摩壇ごまたんが

そのまま

ほこりを被^{かぶ}っている。

須弥壇の後ろに

空間があるように、

たぶん

しゅうちゃんはぶんけり

そこに

隠れているのだらうと

思った。

第3話 僧侶（前書き）

編集済みです。

第3話 僧侶

「待っていたよ。」

静寂を破って、

背後から力に満ちた太い声が

堂内に響き渡った。

突然のことに

私は思わず

飛び上がった。

何事が起こったのか

混乱する意識で

恐る恐る振り向くと、

だれもいないはずの

薄暗い護摩壇ごまたんの上に、

いつの間にか

得体えたいのしれない姿が

影のように

ぼんやりと

現れていた。

「だれ。」

問いかけようとしたが、

意識が混乱して

声にならない。

しかし

相手のさわやかな

声の余韻が心の中に

反響して、

なんとも言えない

懐かしさが

込み上げてきていた。

初めて会った気がしないのだが、

どこかで

会ったことが

あるのだろうか。

私は不思議な気持ちで

そう思った。

そして

危害を加えられることは

ないということが

なんとなく

直観でわかったために、

少し落ち着きを取り戻した。

その影の輪郭が

徐々に鮮明になって、

はっきりした姿が現れてきた。

黒い衣くろいに

黒い袈裟けさをまとって、

小太りで

頭を剃そりあげた

丸顔、

ギョロッ

とした強い眼光の僧侶が

真っ直ぐ

こちらを凝視きやうししている。

首を傾かしげると

まるでカラスが

そこにいるようだ。

しかし

眼の奥には

なんともいえない

やさしい光が宿やどっている。

私は

思いもよらない

突拍子もない出来事に、

ただ

呆然と

立ち尽くしてしまった。

「やっと会えたな。」

ギョロ目の僧侶が

静かに言った。

やっと会えたと

言われても

何を言われているのか、

まったく

理解出来ない。

何を言っているのだろう。

この人は

いったい何者なんだ。

私は頭が硬直したまま

判断できず

面喰らって

視線をそらした。

その途端、

「あれっ」

思わず息を飲んで

我が目を疑った。

ほこりだらけの本堂が

いつの間にか

きれいになって、

護摩壇ごまたんも

須弥壇しゅみだんも

太鼓たいこも

塵ひとつなく

ピカピカに

なっている。

「あつ、

しゅうちゃん！」

思わず声が出た。

いなくなったと

思っていたしゅう君が

せつせと

護摩木ごまぎを運んで

護摩壇の真ん中に

組み上げていた。

しゅう君が

一瞬手を止めて

チラッ

とこちらに顔を向けて

微笑ほほえんだが、

また

そのまま

仕事を続けた。

第4話 護摩（前書き）

編集済みです。

第4話 護摩

目の前で繰り広げられている光景は

いったい

なんなのだろう。

夢なのか、

現実なのか。

いったい

何が起きているのか。

頭が混乱して、

ただ

呆然とするだけだったが、

不思議なことに

恐怖心はまったく

湧いてこなかった。

「おやつ」

私はまた眼を疑った。

いつの間に現れたのだろう。

太鼓の前にも

黒い衣に

黒い袈裟をまとった、

細面ほそおもてで

あごのどがった僧侶が

半眼のまま

微動だにせず

座っている。

なんでこんなに

不思議なことばかりが

起こるのだろう。

私は信じられない想いで

護摩壇に眼を移した。

しゅう君が

高く組み上げたてっぺんに

最後の護摩木を

置くところだった。

護摩木を置いたしゅう君は

ギョロ目に

ちよこんと

頭を下げて合図すると

護摩壇を降りて、

お堂の隅の暗がりには

姿を消した。

ギョロ目の僧侶は

しばらく目を閉じて

何かを念じたあと、

静かに目を開くと、

どろろという言葉なのか。

意味のわからない言葉を

唱^{とな}え始めた。

そして

ロウソクの炎に

細長く

折り曲げた和紙の先をかざし、

火をつけて、

組上げられた

護摩木の根元に

ゆっくと

火を移した。

始めのうちは弱々しく

かすかな

火だったが、

そのうち

パチパチ

音をたてて

火が徐々に広がって行く。

しばらくすると、

火の勢いが増して

だんだん

燃えかたが

激しくなってきた。

ギョロ目の僧侶が

意味不明の言葉を唱えながら

柄杓で

次々に香油を

撒いていく。

火はますます強くなって、

炎と煙りが

勢いよく立ちのぼった。

その熱に

照りつけられて

顔が熱くなってくる。

そのうち

火が

全体を覆^おって、

炎が激しく

渦を巻いて

噴き上がり始めた。

「その須弥壇の前にいるひとを

こちらに連れてきておくれ」

突然、

意識の中に

言葉ではない

何かが響いてきた。

私には

須弥壇という

言葉の意味は

まだ

わからなかったはずだが、

意識の中に

送られて来た波動には

言葉の意味まで

明確に

伝わると

何かがそなわっていた。

第5話 珠（たま）（前書き）

編集済みです。

第5話 珠（たま）

見ると

須弥壇しゅみだんの前に、

ひかっている珠たまが

呼吸しているように

震動しんどうしながら

浮いている。

そして、

それを包むように

ガス体を取り巻いて

若い男の形になっていた。

青、赤、ピンク、

ガス体のひかりの色が

くるくる変わって、

いろいろなものが

その人の回りに

映し出されてくる。

それは

その人が

いま意識で想っているものの

映像なのであろう。

香油の強い薫りが

あたりいちめんに

たちこめて、

頭の芯が

痺れてきた。

やおら、

狐に似た

面長の僧侶が

バチを手を取った。

そして

大太鼓の前に

ピタッ

と構えると、

ひと呼吸したあと、

ゆるやかに

叩きだした。

堂内の空気が

ビリビリ

振動して

衝撃波が全身を打つ。

そして

その音が

徐々に

強さと勢いを増していくと、

その僧侶が音に合わせて

般若心行を

唱え始めた。

かーんじーざい

ぼーさー、

ぎょーじん はんにゃー

はーらーみーたーじー、

ダン、ダン、ダン、

ダン、ダン、ダン、ダン、

ダン、ダン、ダン、ダン、

読経よみぎも

徐々に

勢いがついてきて、

太鼓の音も

強くなってきた。

太鼓の音には

人の心を支配する力が

あるのだろう。

強烈な音が

腹に響いて、

その波動のなかに

すっぽり

飲み込まれ、

意識が朦朧きんごうとしてきた。

私は操あやつられた

夢遊病者むびょうしやのよう

ぎこちなく、

足元がふわふわと

浮き上がったように

なりながら、

須彌壇の前すゐだんにいる

若い男に

近づいて行った。

しかし

連れて来てくれと

言われたものの、

どのようにすればいいのか、

戸惑って

立ちすくんでいると、

突然

自分の体が

何かの力に

支配されたように

ググッ

と動き出した。

そして、

その男の背中を

うしろから押して、

轟々(ごうごう)

音をたてて

燃えている

護摩木の前まで

連れて行くと

立ち止まった。

どうなっているのか、

驚き

戸惑いながら

「ここでいいのかな。」

と気を抜こうとした

途端

「その人を火の中へ

押し込みなさい。」

また

波動が意識の中に

響いて来た。

「えっ」

何を言っているのだろう。

私は人を

火の中へ入れるなんて

考えられなかった。

そんなことをすれば、

焼かれて

苦しみ悶もだえながら

死んでしまっだろう。

先ほどから

この人の不安な想いが

手に取るように

伝わって来るのを

感じる。

しかし

自分の想いを無視するかのように、

また

勝手に体が動いて、

火から逃れようと

もがいている男を、

ウム

を言わさぬ

強い力で

燃えさかる護摩木の中へ

押し込んでしまった。

思ってもみなかった

自分の行動と力に

驚いたが、

火の中に押し込まれた

その男が

「あーっ」

と一瞬苦しそつに

体をよじつたが、

「あれっ」

というような

表情をした。

そのあと

ホッ

とした顔で

何事もなかったように

平然と

立っていることに

また驚いた。

熱さを感じなかったのだろう。

しきーそくーぜーくうー

くーそくぜーしき

やくぶによぜー……

ダン、ダカダカダン、

ダン、ダカダカダン、

ダン、ダカダカダン

太鼓と読経の勢いが

ますます

激しくなってきた。

突然、

須弥壇の周りに

様々な色の

ひかりの珠を

胸の真ん中に抱いた、

たくさんの人々が

現れてきた。

そして、

それぞれが

いろいろなことを

勝手に想っていて、

ざわざわと

ざわめいた波動が

伝わってくる。

太鼓と読経が

鳴り響いていても、

人々の想いの波動は

はつきりと

意識に入りこんでくる。

それぞれの

想念が錯綜^{さくそう}して

場が騒^{さわ}がしく、

太鼓と

読経が

益々（ますます）激しくなった。

全員がだんだん

トランス状態になって、

興奮のルツボと

化してきた

そのとき、

突然、

「キーン」

とかすかな

金属音がした

と思った途端、

「グリーン」

耳をつんざくような

大音響が響き渡って、

全体が

真っ暗で

大きな超高压エネルギーの

チューブの中に

すっぱりと

飲み込まれてしまった。

一瞬の間に、

体が超高压の

電流に感電して、

全身をのけ反らせ、

ジン

と痺れて

硬直したまま

固まってしまった。

頭はグラグラして

目が回り

身動きも

出来ない。

「あーあああ」

思わず

悲鳴にも似た声が

出てしまう。

気が付くと

私も

そのまわりにいる

ガス体の人々も、

そのチューブの中で

同じように感電して

全身を

のけ反らせていた。

見上げると、

そのチューブの

延びている

はるかかなたの

上のほうに

ぽっかりと

丸い穴が開いていて、

そこに

光りが見えていた。

第6話 測候所（前書き）

編集済みです。

第6話 測候所

しかし、

どうなってしまつのだらう。

強烈な感電のしびれと

痛みが

体の芯まで浸透し、

全身が

硬直したままだ。

相変わらず

鼓膜が破れそうなほどの

轟音が

鳴り響いている。

このままの

状態が続けば

巨大なこのエネルギーが

体を

バラバラにしてしまう

のではないかと

強い恐怖を感じていた。

しかし

どうすることも

出来ない。

まったく

身動き出来ない状態で

無重力の中に

漂っているだけだった。

突然、

真っ暗な空間に

どこかの景色が

現れた。

写真だ。

それが

暗闇に縁取られて

空中に浮いているが、

そのうち

それが

立体になってきた。

そして、

その写真が

スッ

とうしろへ引いて

全体が見えるようになった。

あれっ、

週刊誌だ。

週刊誌の写真が

立体になっている。

その写真の上部に

「げんとう厳冬期まの

測候所写真そくこうじょ」

とタイトルが

書いてあった。

いつ頃のもののなのか、

色あせた

セピア色の

古い写真だ。

雪に埋もれた

細長い木造の建物だが、

まったく

ひとの気配がない。

昔使っていたが

今は

廃屋はいあくなのであろう。

一瞬にして

私はその測候所の状態が

理解出来た。

その男の記憶は

飛び飛びに

よみがえってくる。

不意に

情景が変わって、

その測候所の前に

立っていた。

すでに

陽は落ちて

あたりは暗くなっている。

この人は測候所まで

行ったのだ。

この時期に

危険を侵してまで

こんなところへ

行く必要があるのだろうか。

私は不審に思っ

首を傾げた。^{かし}

ふと

気付くと、

いままで

鳴り響いていた

轟音と強烈な痺れが

消えて

まわりが

静かになっていた。

そして

私はその男の

想念の中に

いつの間にか

引き込まれてしまっている

ようだった。

男の想っていることが

自分のことのように

よくわかる。

暗い測候所の外は

しんしんと

雪が降り続いて

静まりかえっている。

野宿しなければならぬのだが、

暗い雪の中で

テントを張るより

この建屋たてやの中で

一晩過ごせたら

安全だし、

体も伸ばせて

休まるだろうと

男は思った。

入口に近づいて

引き戸を

開けようと

力を入れるが

鍵がかかっている

開かない。

どこか

開くところはないか。

扉を探して

開くかどうか

試していると

裏口の引き戸が

動いた。

「おつ、

開いた。」

ホッ

とした想いで

中を恐る恐る

覗き込んで、
のぞ

それから

静かに

体を滑りこませた。
すべ

長い廊下が
ろうか

ずーっ

と奥まで続いていて、

先のほうは

真っ暗な

魑魅魍魎ちみせうじょうの

住家すまがのようじ

暗黒の闇に

なっている。

あちらこちらの

窓ガラスが

割れていて、

雪が吹き込んでくる。

電球は

天井についているものの

スイッチが

どこにあるのか

わからなかった。

たとえ

スイッチが

あつたとしても

電気はとっくに切られていて

点くはずもなかった。

得体の知れない者が

出て来るような

気がして、

思わず

引き返えしたい気持ちが

動いたが、

暗い雪の中を

歩いて来た

疲労感が

それを押しつけた。

一瞬、

廊下の先のほうで

ゆらゆらっと

陽炎かげろふのように

透明な何かが

ゆれて

消えたような気がして、

ゾクッ

と全身の毛が逆立った。

誰かいるのかと

一瞬思ったが、

でも

気のせいだろうと

思い直した。

しかし

気味が悪い。

油断は出来ない。

窓から入って来る

雪明かりを頼りに、

恐る恐る

中へ進んで行く。

ミジッ、

ミシッ、

忍ばせた自分の足音が

廊下に響いて

反響した。

誰かが

後ろから

ついて来るような

気がする。

足を止めてみたが

うしろを振り返るのが

怖い。

意を決して

勢いよく振り向いた。

異変はなかった。

ホッ

とした。

気を取り直して、

どこかに

寝室があるはずだと、

手当たり次第

部屋の引き戸を開けて

廊下から

中の様子を見て行くと、

暗がりの中で

かすかに

ベッドらしい物が

見える部屋を見つけて

中に入った。

足元に注意しながら

手探りで

ズットの

ところまで行くと、

背負っていた

リュックサックをおろして、

中から

小型のランプを

取り出し、

スイッチを入れた。

火がともると、

すべてが

はっきりと見えるようになって、

やっと

落ち着いた。

そこには

木造のベッドが置いてあった。

それに腰をおろすと、

やっと

人心地ついた。

部屋の中は

ほごりが積もって

蜘蛛の巣が

いたる所に張られていて、

天井からは

汚れた裸電球が

ぶら下がっている。

机の上に

インク立てがある。

ペンが置いてあるが

インクが

パリパリに乾いて

固まっていた。

スチールのロッカーは

さびた扉が外れて

床に転がっている。

男は部屋を見回して

しばらく

身じろぎもせず、

じっとしていたが、

「寝袋に入って

寒さをしのぐか。」

独り言を言いながら

立ち上がると、

ベッドの上に

寝袋を広げて、

靴を脱いで

中に足を入れた。

あたりいちめん、

物音ひとつしない。

時々

屋根に積もった雪が

ぞぞーっと、

落ちる音がする。

寝袋に入ると

体が温まってきた。

不意に

降り積もった雪の中を

登って来た疲れが

どっと

襲ってきて、

ウトウト
ミ

とした。

わずかな時間だと思ったが、

どのくらい経ったのか。

男は自分のいびきで

思わず

目をさました。

一瞬

ここはどこなんだと

いぶかるように

少しのあいだ

目を動かした。

そして

ここに寝ている訳を

思い出すと

ホッ

としたように

「ふーっ
」

と息をはいた。

いつの間にか

寝てしまっていたようだ。

男はしばらく

天井を見つめて

ポーツ

とっていた。

ピタン、ピタン、ピタン、

ピタン、ピタン、

何か

音がする。

誰かが

廊下を歩いて来るような、

かすかな音だ。

男は思わず

ギクッ

とした。

背中に

ゾクッ

と悪寒が走って

体が凍った。

全身を耳にして

意識を集中させた。

近づいてくる。

「靴の音ではないな。」

裸足^{はだし}か。」

こんな真夜中の

雪山で

誰もいないはずだが、

だれか

いるのか。

足音はかすかだが、

ハッキリ

と聞こえる。

背中に

ゾワッ

と寒気が走った。

「うわー、

やばいよ。

なにかいる。

お化けか。」

意識が

パニックに陥りそうになった。

耳は

もうその音しか

聞こえない。

突然

ピタッ

と足音がしなくなった。

「ん、

何だろう。

気のせいか。

なんだか

ビク ビク

しているから、

なんでも

変なふうに

聞こえるんだ。

こんなことくらいで

ビビるなんて、

おれもだらしが無いな。」

男は

ひとりで苦笑したが、

しかし

なぜか、

えもいわれぬ不安に

かられた。

そして

体を起こすと

寝袋から

出て靴くつを履はいた。

なにかあつたら

すぐ

動きだせるように

しておこうと

考えて、

靴を履いたまま、

また

寝袋に入って

横になった。

第7話 黒い人影（前書き）

編集済みでした。

第7話 黒い人影

油断なく

あたりに

気を巡らせて、

怪しい気配はないか

探ってみる。

屋根の上に積もった雪が、

時々

ドサツと落ちる以外、

物音はしない。

少し

ホッ

としたが、

気持ちが緊張して

高ぶったせいか

眠気が

すっかり

醒^さめてしまった。

それから

幾度か寝返りをうつて、

どのくらい

時間が経ったのか、

男はまた、

うとうとっ

とした。

スーッ

と意識が遠のいて、

夢うつつのうちに、

遠くのほうで

「キーン」

と微かすかに

金属音のような

耳鳴りがしたな。

と思った

途端、

その音が

グワーン

と急速に大きくなって、

頭が割れんばかりの

激烈な轟音になった。

あーっ、

声にならない叫びを

上げた。

途端に

男の体は

ガチン

と固まって、

まったく

動かなくなってしまった。

声が出ない。

目は開いていて

天井が見えている。

自分の体が

ただの

物体と化して

横たわったまま、

動かそうともがいても、

神経がなくなって

しまったかのように

反応がない。

必死に

何とかしなくてはと、

あがいていた。

しかし

意識は不思議なほど

冷静に

部屋の様子を

うかがっていた。

ヒシヒシ

と不安が増してくる。

体は動かないが、

どういう訳か

目だけは動くのだ。

目で部屋の隅々まで

見回した。

いまは動けなくても

とりあえず

危険はないだろう。

でも

早く

この危機を

なんとかしなければ。

動けないこの状態で、

もし

悪意のある

何かが出て来て

襲われでもしたら、

まったく

なすすべが

ないと思った。

その時

足元の空間が

ゆらーっ

と歪んだかと思うと、

真っ黒な

ずんぐりむっくりした

中肉中背の

人影が現れた。

「えっ、

なんだ。」

思わず

心の中で叫んだ。

恐怖で逃げようとしたが

体が動かない。

「だれだ。」

これはまずいな。

相手の思つままだ。

こいつは何者だ。

どうするつもりなんだ。

その化け物は

凶暴さむき出しの

ギラギラした目で、

まじまじと、

横たわっている男を

見つめていたが、

無言で

ゆっくり

近づいて行くと、

いきなり

ガシッ

と首を絞めてきた。

「うっ
」

すごい力だ。

ぐーっ

と絞められて

息が出来ない。

見る間に

血が止められて

顔が充血し、

眼球が

飛び出しそうに

なってくる。

化け物は

男の上に馬乗りになって

首を絞めている。

「くっ、

くるしいー」

声にならない。

体は

まったく動かさないし、

無抵抗のまま

どうすることも

出来ないのだ。

脇で見ている私のほうにも

同時に

同じ感覚が伝わってくる。

物質ではない

霊の存在ではあるが

強烈な

怨みや憎しみを持つと

肉体に作用するほど

物質化する

ものらしい。

「殺してやるーっ」

突然

絞り出すように

低く

唸るような声が

左耳にささやいた。

化け物の頭が

男の頭の左側にかぶさり、

馬乗りになって

手で首を絞めている。

何とかしなければ、

と気持ちは焦って

もがいているが、

どんどん

絞められていく。

どうにも出来ない。

本当に

殺すつもりなのか。

半分信じられない

想いもするが、

男はこのうっとうしい相手を

なんとか

振り払いたいと

焦っていた。

しかし、

しつこいやつだ。

時間としては

短いのであろうが、

感覚的には

ひどく時間が過ぎたような

気持ちにする。

すると

横のほうの空間に

突然

もうひとつの

黒い人影が現れた。

また

化け物だ。

「この野郎、

姿が見えないと思ったら

横取りしてやがって。」

言うがはいか、

手に下げていた長剣を

躊躇ちゅうちゆもなく

振り下ろした。

ヒュッ、

鋭い風切り音と

横たわっている

男の首に

とり付いていた

黒い影が

ビクッ

と振り向いたのと

同時だった。

「ギャー」

断末魔の悲鳴を残して、

スパッ

と胴体が

真っ二つになった。

しかし

上半身の腕は

首に

まだ、しがみついている。

「くそー、

しぶてー野郎だ。」

言うが早いか

ふたたび剣を

ヒュッ

と縦割りに

鋭く斬り下げた。

鋭い悲鳴とともに

強欲剥ごうよくむ（き出しで

取り付いて

首を絞めていた腕が

真っ二つに断ち切られ

バタリ

と両脇に落ちた。

「油断もすきも

あつたもんじゃねえ。

こんなところまで

くつついて来てやがったのか。」

いまいましそうに

見ていたが

「こいつも

しばらくは動けねえだろうが、

元に戻ったら

八つ裂きにしてくれる。」

はき捨てるように言いつつ、

気を取り直して

寝袋の男に

視線を向けた。

「やっと

ここまで追い詰めたぞ。

この体はおれがもらっつ。

誰も手出しするな。」

あたり一面が

ザワザワっ

と揺らめいたと

思うと、

ズラーっ

と黒い人影が

隙間もないほど

ひしめき合って、

その凶暴な

影の男の一挙手一投足を

凝視している。

いま斬られた

男の体は

しばらく動かなかったが、

しばらくすると

意識が戻ったように

ジリッ、

ジリッ

と斬られて、

はなればなれになった

残骸が

元の体に復元するよつに

距離が縮まって行く。

「おまえら、

その死神を

押さえておけ。

俺のじゃまをさせるな。

いいか。」

凶暴男が

群集に向かって

言った。

「へー、

おっしやる通りに

いたしやす。」

黒い影が

ひしめき合う中に、

手足をつかまれて

身動き出来ないでいる

死神の頭巾の中に

顔は無く、

真っ暗な

深い空洞に

なっている。

その空洞のかおが

怒りで

歪ゆがんでいるように

感じた。

「おい、

その鎌をこっちへよこせ。」

「へえー」

死神を

押さえ付けている手下が

死神から

無理矢理鎌を

ねじり取って

凶暴男に手渡した。

「この鎌じゃねえと

仕事にならねえんだ。

死神を捕まえるのに

てこずったがな。

俺に不可能はないんだ。

ざまあ見やがれ。

「この通りだ。」

手に持って

満足そうに、

鎌をながめてから

「いいか、

おまえら、

これから俺が

こいつの霊子線を

半分だけ切る。

それで

こいつの魂が弱まって

意識が薄れたら

俺が

こいつの胸の下側から

魂を抜く。

そしたら、

こいつを

すぐに戻れないところまで

引っ張って行って

捨ててこい。

その間に

俺は

こいつの体内に入って

肉体を支配する。

わかったか。」

「へーい、

おっしゃる通りに

いたしやす。」

凶暴な影の男が

鎌で探りながら

心臓についている

霊子線の根元に

鎌をあてがって、

ゆっくりと

刃を引いた。

「あー、

殺されるーっ。」

恐怖に駆られて

寝袋の男が

思わず

声にならない声で

さげんだ。

突然

ズキーン

と男の胸に

激しい痛みが走った。

意識が

だんだん薄れていく。

それを見計らって

凶暴な影の男が

みぞおちのあたりから

手を差し込むと、

魂をつかんで

引き出そうと

腕を引き抜き始めた。

まわりの手下達が

我先に

手柄を自分のものにしよつと、

互いに

押しつけあつて

ひしめきあつて

待ち構えている。

凶暴男の腕が

とつとつ

魂を引きずり出した。

「出たー、

出たー、

出たー、」

場は騒然となった。

口々に

ヒステリックな

狂喜の雄叫びとともに

魂の奪い合いになって、

噛み付きあい、

なぐりあい、

興奮して

相手を八つ裂きにしたり、

大乱闘になって

激しい争奪戦と

化してしまった。

この連中は

感情が

極端に揺れ動いて

自分では

押さえきれないらしい。

一度興奮すると

極限まで

いってしまおうようだ。

思うことが

そのまま

行動になってしまっ

相手に

憎しみや怒りを

感じた瞬間に

相手を

襲ってしまうのだ。

憎しみや怨みが

深ければ深いほど、

その行動は

残酷になる。

本人達も

どうすることも

できない

安らぎも

ゆとりもない世界が

そこには

広がっていた。

思うことは

相手に

すべてわかってしまっ

ごまかすことは出来ない。

思った瞬間に

行為になる。

抜け出すことが出来ない

非情な

霊の世界だった。

第8話 羽音（前書き）

編集済みでした。

第8話 羽音

霊子線を

半分近くにまで

切られてしまった

若い男の意識が

朦朧もろろとしてきた。

恐怖に気が動転して

何が何だか

まったくわからない。

まわりは

けたたましい笑い声と

はやしたてる嬌声こゝろで

騒然そうぜんとしている。

壺子線は

切られてゆく。

「あーっ」

悲鳴を上げたが

声にならない。

どうなってしまっのか。

固唾かたすを飲んで

見ていることしか

出来ないのだ。

とそのとき

バサッ

と羽音がした

かと思うと

凶暴男の姿が

忽然と消えた。

見ると

真っ黒で

大きな

鳥からすのような鳥が

ふわっと、

寝ている男の

足元の空間に

浮いていた。

大鳥は

頭を斜めにかしげて

キョト、

キョトと

あたりを

見回している。

そして

そのくちばしに

凶暴男が

くわえられていた。

大声で

わめきながら

手足をバタつかせているが

離してもらえない。

「俺を誰だと思ってるんだ。」

放せ、

この馬鹿鳥が。

くそー、

放さねーかー。」

おおからす
大鳥は

凶暴男を

からかうような

とぼけた顔で

すましていたが、

突然

パクン

とくちばしを開けた。

「あー」

凶暴男は

叫びながら

下に落ちて

床^{ゆか}ではずんだ。

「くっそー、

ふざけやがって、

なめんなよー。

俺の本当の力を

知らねえなー！。

わからせてやる。」

手下達の前で

恥をかかされ、

逆上のあまり

体を包んでいるオーラが

怒りの炎と化して

激しく燃え上がった。

異常なほどの興奮で

肩で息をしながら、

ゆっくり

立ち上がると、

大鳥に向かって

身構みがまええた。

すると

凶暴男の背中から

ズルズルッ

と黒く短い毛に覆おおわれた

羽がはえてきた。

「あ、

こもりの羽だ。」

私は驚いて

息を飲んだ。

激しい怒りが

体を変身させるのだろう。

そして

その男の体が

みるみる

膨ふくらんで、

大鳥と

同じ大きさになった。

筋骨隆きんこつ々（りゅうりゅう）

着けている

真っ赤かちちゆうな甲冑かうの

肩から背中にかけて、

ズラリ

と尖とがった

長い角が

とび出している。

手と足にも

鋭い鉤爪かぎつめが

はえて

光っていた。

口は大きく

横に裂さけて、

目は狂気をはらんで

真っ赤に燃えている。

「ギャー、

ギヤー、

ギヤー」

人間とは思えない

不気味ぶきみな声で

大がらすを

威嚇いかくしていたが、

剣を右斜め上段に構えて

ジリッ、

ジリッと、

間合いを詰めて行った

かと思いつと、

ビュッ

と振り下ろした。

ザッと

切っ先が

大鳥の胸に

斬り込まれた。

鋭い一撃に

バラバラッ

と斬られた羽根が

あたりいちめん

舞い散って、

まわりを

取り巻いている

手下達の上に

舞い落ちた。

「ウギヤー、

やっちまえー、

殺せー」

手下達が

かさにかかって

一斉にいっせい

吠ほえかかる。

こつもり男は

すっかり

気をよくして、

自信満々

グッ

と腰を落として

剣を斜め下段に

身構えた。

しかし

大鳥は

何を考えているのだろう。

顔を

よく見てみよう

とでも思ったのが、

首を伸ばして

頭を

又ーッ

と、こつもり男に近づけた。

「しめた。」

こつもり男の真っ赤な目が

思いもよらないチャンスに

狂喜して

キラッっ

と光った

その一瞬、

下から斜め上に

剣を突き上げた。

ビュッ、

鋭い音が

空間を斬り裂いた。

「やった。」

誰もがそう思った。

次の瞬間、

強烈な衝撃を

脳天に受けて

こもり男の体が

グラッ

と、崩れ落ちた。

それは

一瞬の出来事だった。

大鳥は

くちばしの先に

剣をかすめさせながら

かわした

瞬間、

体勢が崩れた

こつもり男の脳天に

電光石火の

強烈な

くちばしの一撃を

炸裂さくれつさせたのだ。

ウォーッ、

手下達は恐れおののき

慌あわてて

後ろへ下がった。

あなどれない相手だ。

大鳥から距離を離して

様子を窺^{うかが}っている。

いつのまにか

死神の手に

鎌は戻っていて、

手下達が

大鳥とこもり男の戦いに

気を取られているうちに

姿を消していた。

鎌は常に

死神を探して、

鎌のほうから

戻って行くのだ。

ふわっ、

と大鳥が

寝袋の上に

浮いて止まった。

「あ、

足が二本ある。

「こんな鳥かしらがいたのか。」

私が不思議に思いながら

見ていると、

大鳥は

自分の背中の羽根の間に

くちばしを入れた。

そして

何かをくわえて

そつと

取り出した。

金色に光る

小さな粒だ。

それを

寝袋の中の

男の真上から

落とした。

金色の粒は

スーッ

と落ちて行って、

心臓の上に

着地すると

少しの間

うづくまって

じっ

としていたが、

すっ、

と長い足が出たかと思うと、

切られた霊子線のところへ

一直線に

近寄って行った。

そして

セッセ、

セッセ、

と一心不乱に

幅の広い

金色の糸を出して

傷口を

貼り合わせ始めた。

みるみる

傷口はふさがって、

徐々に

体に活力が

よみがえってくる。

よく見ると

女郎蜘蛛じょうごくものような

足の長い

金色の蜘蛛だった。

第9話 金色の蜘蛛（前書き）

編集済みでした。

第9話 金色の蜘蛛

しばらくすると

脳天を

したたかに

打たれて

気を失っていた男の意識が

戻ってきた。

うつろな目を開いて

しばらく

キョロキョロ

見回していたが、

だんだん

意識がはっきりしてくると、

不意打ちでやられたことを

思い出した。

そして

手下達の見ている前で

あっけなく

ぶちまけ

やられてしまった屈辱感が

怒りとなって

込み上げてきた。

「くっそー」

ボツ

と炎のオーラが

噴き上がった。

ふらふらしながら

立ち上がって

大鳥おおからすのほうに向き直ると、

どつちったら倒せるのか

考え始めた。

さっきは油断して

簡単にやられてしまったが、

しかし

相手は思ったより手ごわい。

正面からでは

かなわないかも知れない。

みんなが見ている中で

再び

負けるわけにはいかない。

何が何でも

勝たねばならなかった。

コウモリ男は剣を持つと

卑劣にも

忍び足で

大鳥の背後に

回って行った。

大鳥は

それに気づいているのか、

いないのか、

寝袋の男の霊子線を

修復している

金色の蜘蛛くまの

動きを見つめている。

コウモリ男は

相手が

他に気を取られているのを

いいことに、

一刀両断の

チャンスとばかり、

うす笑いを浮かべながら

真うしろへ回った。

大鳥は

まだ気づいていない。

コウモリ男は

そーっ

と剣を振りかぶって

腰を落とすと

電光石火、

「だあっ」

と飛びかかった。

途端、

大鳥の目が

クリッ

と動いた、

瞬間

頭が

鋭く回転した。

剣を振り下ろしたところを

高速で回転して来た

固いくちばしが弾いた。

カキーン、

音がしたと思うと

コウモリ男が

剣もろとも

風車のように

クルクルッ

と回って

下へ落ちた。

そこは百戦練磨の

地獄世界を

生き抜いて来た男だ。

落下しながら

くるり

と体勢を立て直して

スタツ

と着地した。

どんなもんだ。

コウモリ男は

釣り上がった

冷酷な目で

顔を引きつらせて笑った。

なかなか

しぶとい奴だ。

簡単には引き下がらない。

次に何を企たくらんでいるのか、

構かまえも見せず、

不意に

「ゴッ」

と音をたてて

剣を横にはらってきた。

今度は

足をねらったのだ。

大鳥は

ふわっ

と飛び上がってかわすと、

突然

バシーン

と床ゆかに

翼つばさを叩たたきつけた。

強烈な衝撃波が

爆弾のように、

あたりいちめん

取り囲んでいる

黒い影の一団と

こうもり男を

木^こっ端^ばみじんに

砕いてしまった。

すべての

黒い軍団が

跡形もなく姿を消すと、

再び

もとの静寂が

戻ってきた。

金色の蜘蛛は

傷口を塞いだ後、

霊子線れいしせんをたわませると

心臓との間に

糸を張って

金色に輝く蜘蛛の巣を作った。

そして、

その真ん中に

ちよこんと

陣取った。

寝袋の男は

すっかり

元気を取り戻していた。

「観世音菩薩をとなえれば、

救いの手は

差し延べられるが、

観音力を

使いこなすには

注意しなければ

ならないことがあるのだ。」

大烏が寝袋の男に

静かに語り始めた。

くちばしが動いていない。

「これも

テレパシーだ。」

不思議な興奮を覚えて、

食い入るように

凝視しながら、

私は聞き耳をたてた。

第10話 観音力（前書き）

編集済みました。

第10話 観音力

「観音力とは何か。」

大烏が

静かに問いかけた。

何かと

問われても

わかるはずがない。

何だろう。

観音と言うのだから

観音の力だろう。

超能力か。

男はぼんやりした意識で思った。

突然、

空中から

激しく炎が噴き出して、

光りのラインに

縁取ふちどりられた

腕が現れた。

そして

そのラインの内側に

無数の星々が

輝いている。

まるで

星が集まって

出来ているような腕だ。

これは、

と訝いぶかった。

その途端、

その腕が

バツ

と拡大して

部屋全体を覆った。

そして

男はすっぽり、

その腕の中に

入り込んでしまった。

次元が

一瞬に変化して、

真っ暗な空間になった。

いままであった

建物も大地も

すべて失せ、

あっ

という間に

男は宇宙のまっただ中へ

ほうり出されてしまった。

砂つぶのような

星が隙間なく

びっしり

宇宙空間に

詰まっ
ていて、

その無数の星の

かたまりに

自分が

吸い寄せられて行くような

感覚になってくる。

これは

いったい

どういうことなのか。

息を飲む

巨大な宇宙の迫力に

圧倒されて

声もなく

見入っていたが、

はたと考えた。

広大な宇宙にただ一人、

まわりに何も無い

無重力の状態で

体を動かそうとしても

手足をばたつかせるだけで

移動すら来ない。

と言ふことは

これからどうすればいいのだらう。

帰るに帰れない。

このまま

ずっと

ここにいなければならぬのか。

助けてくれる者は

誰もいない。

太陽らしいものも

地球らしいものも

見あたらないところを見ると

太陽系以外の場所なのだろう。

こんなところで

野垂れ死にか。

一瞬

恐怖が湧きあがって、

意識は

パニックに陥^{おぼ}った。

くじけ

じたばたしていたが、

ふと

心の奥の

深いところに

何かを信じて

揺るぎなく

動じない部分が

あることに

気づいた。

その場所に想いを合わせた途端

ふわっ、

と安心感に満たされて、

心に冷静さが

よみがえった。

人間の中心には

不思議な領域が

あるのかも知れない。

冷静に考えることが

出来るようになって

あらためて

全体を見回す余裕が

出て来た。

砂粒のような

星屑が渦巻いて

密集したその中に

自分が埋もれている。

ふと

見ると、

いつの間にか

自分の体が

星層のひとつのようだ

光りを放射して

輝いていることに

気づいた。

体の中心に

核融合が生じて

エネルギーを

放出し始めたのだろうか。

そして

砂粒のようだ

見えている

恒星のひとつひとつに

意識を向けると、

それらが

ワッ

と拡大して

星が目の前に

迫って来る。

それは

太陽のように燃えている

巨大な星や

渦巻いている星雲、

濃厚なガス、

あらゆるものが

意識を向けただけで

拡大し、

それらの詳細な部分まで

一瞬にして

理解出来るようになっていた。

自分のエネルギーが

ますます

強さを増して

輝きは

頂点に達した。

音のない

無味乾燥な

宇宙空間だと

思っていたものが、

人間の

感じることの出来ない次元では

非常にエネルギーッシュで、

にぎやかな場所であることを

感覚で悟った。

そのひとつひとつの星々は

懐かしそうに

男の意識に

何かを伝えようと

しているようだった。

宇宙は核融合炉の集合体であり、

高圧エネルギーが充満して、

それらが

集中拡散の

生成と消滅を

繰り返している

場所だったのだ。

宇宙自体が

もっているエネルギーは

どれほど凄^{すご}いものなのか。

想像すら出来ないが、

しかし

男は自分の内側に、

この宇宙という

外側のエネルギー体の中に

充滿しているエネルギーと

均衡を保つほどの

エネルギーが

存在していることを

感じ取った。

一個の星のように

光り輝いて、

宇宙と一体であったということ

この時

始めて理解した。

人間も宇宙に遍在するエネルギーで

出来ていたのだ。

それは言葉ではなく

感覚としてわかった。

男は今ここで

見て感じていることを

かつて

経験したことが

あったような想いが

感覚の中に

微かな記憶として

残っているような気がした。

過去世のどこかで、

このような体験が

あったのではないだろうか。

男はしばらく

夢想にふけていた。

すると

突然、

天幕が引かれるように

覆^おっていた腕が

縮んで

元に戻ると、

部屋は

何事も無かったように

静まりかえったままだった。

男は

この強烈な体験の余韻に

呆然ぼうぜんじしつ自失の状態のまま

動くことが出来なideいた。

「少しわかったようだな。」

はっと

我に返った。

大鳥が相変わらず

空中に浮いたまま

男を眺めていた。

いったい

この鳥は何者で

何を伝えようとしているのだろうか。

男は

次々襲って来る出来事を

受け止めかねていた。

私に何を理解しろと

言うのだ。

男がそう思ったとき、

突然、

空中に浮いている腕の

手のひらの上に、

太陽が強い光りと

熱を放って現れた。

おおっ、

男は横になったまま、

ただ

目を見開いた。

すると

真っ黒な大鳥の体のまわりが

淡い金色の光に包まれたか、

と思うと

ピカーッ

と強い光を放射して、

さっ、

とその太陽の中に

吸い込まれて行った。

太陽の中に入った大鳥は

しばらく

寝袋の男を見ているようだったが、

無言のまま、

光り輝く手のひらとともに

スーッ

と淡^{あわ}いかすみのように

薄れていって、

ゆっくりと

消えた。

後は

何事もなかったように、

また

元の暗い部屋の中に

戻っていた。

「あの鳥と腕は

いったい何だったのだろう。

観音力とは何か、

と言っただけで

何も教えてくれないまま

消えてしまったが、

何を伝えようとしていたのか。

次々、

訳のわからない出来事に襲われ、

頭が混乱して、

夢だったのか、

現実だったのか、

男は区別がつかなくなっていた。

しかし、

あらためて

自分の胸のあたりに

意識を向けると、

金色の蜘蛛が

巢の真ん中に、

じつと

張り付いているのが見える。

どろぢぢら、

心眼しんがんを意識すると

あの世の存在が

見えるように

なってしまったのかも知れない。

放心状態のまま横になって、

あれこれ考えているうちに

寝てしまったらしい。

まぶしいくらいに

明るい朝日が

窓から差し込んで来て、

寝ている男の

眠りをさました。

空は抜けるような

快晴になっていた。

第11話 自宅（前書き）

編集済みでした。

第11話 自宅

帰りの道は

とても

順調だった。

金色の光に包まれた蜘蛛くもの

安らぎのある

温かい波動が

男の意識に

伝わって来て

心が和なごんで

嬉しかった。

電車が

都会に近づくにつれて

高層ビルが林立してきた。

都心で幾度か

電車を乗り換えて、

まだ

周辺に緑の残っている

郊外の駅に止まると

そこで下車した。

冷たい北風が吹き抜ける

プラットホームは

帰りを急ぐ人々で

いっぱいになっている。

コートの襟えりを立てた

サラリーマンが

寒そうに首をすくめて

小走りに改札口へ

向かって行く。

その後を

ゾロゾロ

人々がついて行った。

改札口を出ると

すでに

日は沈んで、

微かな夕日の

赤い残光に

西空が染まっていた。

郊外と言っても

家がところ狭しと建ち並び、

道路を

車が頻繁に行き交って

空気は

排気ガスで濁っている。

家路を急ぐ人々が

狭い歩道を往来し

混み合って歩きづらい。

男は大きなリュックサックに

登山靴をはいて

冬山用に

重装備をしているために、

寒いどころか

少し汗ばんでいた。

駅から少し行くと

商店街に入っていく。

それぞれの店に

あかりが灯り、
とも

私設市場の売り声が

外まで響いてにぎやかだ。

商店街の中程の

左側にある

理髪店を過ぎたところで、

男は

「おやつ」

と立ち止まった。

その先の右側に

シャッターの閉まったままの

酒屋があつたはずだが、

店の様子が

いつもと違う。

その酒屋は

繁盛していたにもかかわらず、

ギャンブル好きの主人が

麻雀賭博に狂って、

負けがこんだ挙げ句、

最期の大勝負とばかりに、

この店を賭けてしまった。

相手はその道のプロだ。

そうなるであることを

始めから、

もくろんでいたのだろう。

「よし、勝負だ。」

体が震えるほどの

緊張感と緊迫感、

真剣勝負で

刹那^{せつな}の大興奮の後、

奈落の底に転落した。

素人が

太刀打ち出来るような

相手ではない。

あっけなく負けて

店は取られてしまった。

そのまま

酒屋一家は行方知れずになった。

その店が改装して

新装開店している。

いつ直したのだろう。

三日前の早朝、

まだ暗いうちだったが、

男が山へ出かけるときに、

この前を通った。

その時は

いつも通りシャッターが

閉まっていたと思ったが、

しかし

記憶違いか。

それとも

気がつかなかったのだろうか。

こうなると

自分の記憶に

自信が持てなくなってくる。

半信半疑のまま

首を傾^{かし}げて、

店を見た。

喫茶店か

スナックのような店なのだろう。

看板の電気がついている。

もう営業しているのだ。

狐につままれたような

気分になって、

あたりを見回した。

道を歩いている人々は

以前から

店がそこに存在していたように

まったく

関心を示すこともなく、

素通りして行く。

という事は、

この店が出来ていたことに

自分が気づかなかった

ということだったのか。

まあ

こういうこともあるのか。

気を取り直して

男はまた歩き出した。

その先にカメラ店がある。

そこを左に曲がった。

商店街は駅通りだけで、

その通りをそれると、

あとはずっと

住宅街が続いている。

途中、

幼稚園があり、

クリーニング店や駄菓子屋がある。

しばらく行くと、

雑木林が残っているところに出た。

そこを過ぎると

また住宅が建ち並んでいる。

男は足早に歩いて行く。

駅からだいぶ離れた、

と感じたころ

家と家の間の路地を

右に入った。

その中は

縦横にきちんと区画整理された

分譲地になっていた。

男は路地の奥に建っている

一戸建ての家の

玄関にたどり着いた。

表札には

「無踏一郎」

と書いてある。

「無踏一郎という人だったんだ。」

私は初めて名前を知った。

チャイムを鳴らすと

玄関の扉が開いた。

無踏が中に入って行く。

「今回は帰りが早かったわね。」

どうかしたの。」

出迎えながら

妻の優子が

以外な顔をして言った。

「ん、

まあな。」

あの出来事を話しても

信じてもらえるかどうか、

わからないなと思って、

無踏は言葉を濁した。

優子是不審な顔をしたが、

それ以上は聞かずに

キッチンに戻ると

夕食の支度を続けた。

無踏にとって

今回は何が何だか、

わけのわからないことが

次々起きて、

まだ気持の整理がつかなかった。

部屋着に着替えたあと、

自分でコーヒーを入れると、

ソファーに座って飲みながら、

無造作むじょうさくに置いてある、

山へ出かける原因となった

週刊誌をめくっていた。

しかし、

あるところに来ると

何度もページをめくり直した。

あれっ、

意外だという顔をして

座り直した。

「変だな。」

無踏は週刊誌を見つめたまま固まった。

信じられない。

週刊誌の中にあるはずの

測候所そくこうじょの記事が

まるごと消えているのだ。

誰かがその部分だけ

抜き取ったのだろうか。

しかし

それらしい形跡けいせきは

まったく見当たらなかった。

どついつ訳なのだろう、

この週刊誌の記事を読んで、

今回測候所に行つて来たというのに、

俺が読んだあの記事は

いったいどこへ消えたんだ。

不思議なこともあるものだ、

と思ひながら、

しばらく考え込んでいた。

「食事出来たわよ。」

どうしたの。

「ぼーっとして。」

はっと

我に返った。

優子が無踏の様子を見て

声をかけていた。

「ああ、

あいよ。」

無踏はソファーから立ち上がった、

グツグツ煮え立つ

土鍋が置かれたテーブルの

椅子に座った。

そして

鍋の蓋を取ると、

湯気が勢いよく

立ちのぼった。

野菜と豆腐が

たっぷり入った蟹鍋だ。

「おお、蟹鍋か。」

「そうよ。」

きょうは奮発して蟹にしたの。

もっと食べたかったら、

まだあるわよ。」

蟹好きの無踏は

嬉しそうに食べるはじめたが、

しばらくすると

箸が止まった。

「あのさー。」

「なーに。」

「ソファアアの上の週刊誌

だれか読んだのかな。」

「週刊誌？」

誰も読んでないわよ。

どうして？

読んだらいけないの？」

「いや、

そうじゃないんだ。」

「なによ。

どうしたのよ。

週刊誌がどうかしたの？

なんだかさつきから変ね。」

優子は箸を止めて

無踏の顔を見つめた。

「うん、

変なんだ。」

「なに言ってるのよ。」

バカじゃないの。

しっかりしてよ。」

「うせ、

そっじゃなくて、

あの中に

測候所の記事があったはずなんだけど、

その記事が消えてるんだ。

どうしちゃったんだろうと思ってた。「

「消えちゃったって、

そんなことあるわけないじゃない。

夢見たのよ。

夢で見たのを現実だと

思っちゃったのね。

ちょっとおかしく

なっちゃったんじゃないの。」

「夢じゃないんだけどな。」

間違いなくはつきり見たんだ。

変だよな。

どうなってるんだろう。」

「あらまあ、

そんな夢見て

山奥まで行っちゃったんだ。

ばかみたい。」

優子は呆れた顔で言った。

無踏はこれ以上言っても

信じてもらえないと思って、

話題を変えた。

食事を終えた無踏は

階段を上がって

二階の仕事部屋に入ると、

机の上に置いてある

パソコンのスイッチを入れた。

そして

机のうしろにある

ソファークラッドに腰掛けた。

どう考えても

あの測候所の写真が

無かったとは思えないのだ。

現に胸のところに

金色の蜘蛛もいるし、

測候所まで行った体験まである。

しかし

無踏自身も、

この金色の蜘蛛が

実体として

存在するものなのか、

測候所の体験が

現実だったと

断言出来るのかと

いふことになるよ、

判断があやふやになってしまふ。

しばらく

ポーツ

と考えていたが、

パソコンが

立ち上がっていることに気づいて

机の前の椅子に座ると

ワードを開いて

文章を打ち込み始めた。

金色の蜘蛛は寝ているのか、

身じろぎもせず

蜘蛛の巣の真ん中にいる。

無踏は測候所でのことを

書き止めようとして

書き始めたが、

だんだん

書くことに夢中になっていった。

どれほど時間が経ったのだろうか。

妻が階段を上って来る足音がして、

フッ、

と我にかえった。

お茶の差し入れかな。

と思っていたら、

足音が一段一段上がって来て

仕事部屋のドアのところ

しなくなった。

あれ、

どうしたんだ。

お茶じゃなかったのか。

しばらく

聞き耳を立てていたが、

別に怪しむことでもない。

隣の部屋へ行ったんだな。

と思っ

また

パソコンに向かいだした。

気が付くと

朝がしらじらと明けて、

すずめがさえずり始めた。

無踏はパソコンを閉じると

椅子の後ろにある

ソファークラッドに置いてある

掛け布団にくるまって

横になった。

第12話 稻荷大明神（前書き）

編集済みでした。

第12話 稻荷大明神

無踏むとつは

昼近くに眼をさました。

起き上がった

階下へ下りて行くと、

カップに入れた

インスタントコーヒーに

ポットのお湯を入れて

ソファーに座りながら

ゆっくり飲み始めた。

小説家としての

仕事があるのだが、

まだ測候所のこと

頭から離れない。

締め切りの迫っている原稿の

続きを書き始めようとしたが、

いまいち

気乗りがしなかった。

外出して気分を変えてみようと

服を着て外へ出た。

優子はどこかに出かけたらしく、

家の中にいなかった。

歩いて駅に向かった。

そして商店街に入ると、

昨日気づいた、

酒道を改装した店が

幻覚ではなく

本当に実在しているのか、

もう一度確かめたいと、

店の前で立ち止まり、

調べてみた。

どうも幻覚ではなさそうだ。

しかし

短期間で

よく店が出来たものだ。

最近

店は改装するのも早いなど

無踏は感心しながら

駅に着いた。

そして

駅から電車に乗った。

途中で乗り換えて、

しばらくぶりに渋谷の街へ出た。

そして

なにかおもしろい店があったら

入ってみよう

あてもなく歩き出した。

八千公前から

どろげんざか
道玄坂を上って行く。

いつ来ても人がひしめき合い、

雑踏のエネルギーが

反発力となって

重くのしかかってくる。

その分厚い塊のような

壁を押しつけながら、

ひゃくけんだな
百軒店のほうへ

入っていった。

坂道を上がって

丁字路に出ると、

その先が露地のように細く、

店や家などが密集している。

どこかにいい店はないかと

あたりを見回したが、

このあたりには

無踏の興味を引く店は

ないようだった。

あきらめて

他の場所を探してみようかと

足を早めた。

不意に

何かが

ザザーッ

と足元を横切って止まった。

くしゃくしゃっと

丸めた紙屑が

吹き流されて

飛んで来たのだ。

こんなところに

誰が捨てて行ったのだろうか。

でも待てよ、

いま風が吹いていなかったと思うが、

おかしなこともあるものだ、

と思いながら

通り過ぎようとした。

すると、

また、

ザザーッ

と紙屑が足元に絡み付くように

追いかけて来て止まった。

「何だろう。」

紙屑がまるで

意志を持っているような

気さえしてしまう。

そのまま気にせずに

通り過ぎようとした。

しかし

気になって、

もう一度足元を見た。

すると

ただの紙屑だと

思っていたその真ん中に、

目玉のようなものが

二つ並んでいる。

好奇心が湧いて、

膝に手を置き、

体を曲げて

覗き込んだ途端、

キョロツ、

と大きく見開いた丸い目が

無踏をじっと凝視した。

「ウワッ」

と一瞬驚いたが、

好奇心に引かれて

再び紙屑を覗き込んだ。
のぞ

その眼は

まっすぐ

無踏の顔を見ていたが、

ニヤッ

と笑うと

ザザーッ

と無踏が来た方向へ

地面を滑って行った。

そして

家の壁のところまで

上へ舞い上がると

角を曲がって消えた。

「なんだあれは。

生き物なのか。」

紙屑が消えたほうを

しばらく見ていたが、

我に返えると

信じられない想いのまま

歩き出した。

その露地が

突き当たりになる。

右側にお稲荷さんの鳥居が立っていて、

その奥にお宮が見えている。

そこから道は左に折れているが、

なぜか

そのあたりで

何かが圧倒的なエネルギーを

発しているのを感じて

意識を凝こらした。

景色に透すけて

得えたい体の知らない

真っ黒な大集団と

赤い鳥居の中の

白い小集団が

まさに

一触即発で

睨^{にら}み合^あっ^て

火花を散らしているのが見えた。

徐々に

意識がその場の中に

同化していくと

輪郭がハッキリしてきて、

そこで睨^{にら}み合^あっ^ているのが

狐の集団だということがわかった。

黒い煤^{すす}のようなものが

立ちのぼっている狐達の顔には

凄^{すこ}みがあり牙が鋭く、

見るからに

凶暴なぎらついた眼の奥に

憎しみの炎が燃えている。

「稲荷大明神を

畏^{おそ}れぬ所業^{しよごわざ}なるぞ。

稲荷大明神がお出ましになられれば、

そなたらはただでは済まぬぞ。」

白い狐集団の代表らしい者が

大声で威^{いあつ}圧した。

「ふん、

稻荷大明神が

いま留守だといつじとぐら

知らぬとも思っているのか。

大馬鹿者め。

だがおぬし、

我らがラスホル大帝王様のお力を

まったく

わかっておらぬと

見えるな。

ラスホル大帝王様がお出ましになれば

稻荷大明神など、

ひとたまりもないわ。」

ボス狐が勝ち誇ったように

顎をしゃくり上げた。

煤^{すす}けて薄汚れたオーラで

残忍な目を光らせ、

耳まで裂けた口で

嘲笑^{あざわら}うように

言ったかと思つと

「やっちまえ。」

鋭く叫んだ。

「ギャオーっ、」

狂暴さをむき出しにした

黒狐の集団が

一斉に雪崩れを打って

白い狐達に襲い掛かった。

白い狐集団も

それに抗戦していたが、

多勢に無勢、

あっという間に

劣勢になって

犠牲者が続出した。

みんなズタズタに噛み裂かれ、

白狐達の残骸が

見るも無惨に

あちらこちらに

横たわって、

瞬く間に

最後の一匹になってしまった。

最後まで残った

腕の立つ白狐一匹が、

油断なく

黒い狐達を

気で押し返している。

ふさふさした長い尻尾が

キラキラと輝き、

後ろに延びて美しい。

無踏は思わず

あの白狐を助けたいと思った。

その瞬間、

右手に光り輝く矢が現れ、

左手に弓が握られていた。

考えている暇はない。

思わず

黒いボスに向かって

弓を引き絞って

射かけようとしたが、

引き絞ったまま

一瞬躊躇して

間まが空あいてしまった。

弓で射ることの

抵抗感が

意識にブレーキをかけたのだ。

その瞬間、

気配を感じたのか、

ボス狐が

サッ

と飛びのくと、

じっと

無踏の顔に目を据えた。

手下達も

一斉にボスが身構えた方向に

体制を向けて

ゾロゾロッ

と無踏を取り囲んだ。

「しまった。」

無踏は気が動転して、

サーッ

と一瞬に

恐怖が心を支配した。

再び弓を引こうとしたが

気が付くと

手の中にあつたはずの

弓と矢が消えている。

「俺を誰だと思っているんだ。

俺に弓を引くとは

身の程を知らぬやつだ。

このまま帰すわけにはいかねえ。」

ボス狐が勝ち誇ったように

言っがはやいか

ズッ

と身を沈めた。

ドドドッ、

胸のほうから

波動が伝わってきた。

「ゆっくり深呼吸して、

観世音菩薩に

すべて任せるのだ。」

金色の蜘蛛が

テレパシーを送ってきた。

蜘蛛はうしろ足を

巣の真ん中から伸ばし、

それから

垂らした金色の糸の先端に

丸い粘液の分銅ぶんどうをつけたものを、

ゆっくり回していた。

その糸が

段々延びて

回転の輪が

大きくなり、

回転速度も

速くなってきていた。

目にも止まらぬ速度で

ブンブン

回っている。

ボス狐の獰猛な目が

攻撃色と殺気を帯びて、

じっと

無踏の隙を狙っていたが、

「ゲアッ」

っという声とともに

黒狐の体が

宙を飛んで

目の前に迫って来た。

瞬間、

キラッ

と細く鋭い光りが横切って

クルクルッ

と黒狐の体に

高速で巻き付いた。

あっ、

というまに

金色の糸の塊になって

体が転がったまま

動かなくなってしまった。

黒いボス狐が

金色の蜘蛛の糸に、

がんにがらめに巻かれて、

身動き出来ず

目だけが

ギョロギョロ

光っている。

口まで糸が巻いて

声も出せない。

手下達はちょっと怯^{ひる}んだが

ボスを助けて

手柄を立てようと

いきり立って、

一斉に飛び掛かること

困んでいる間合いを

縮めてきた。

一斉に来られたら

金色の蜘蛛でも

対抗出来ないのではないだろうか。

無踏に不安が走った。

黒いオーラの集団は

強烈な脅迫の念力を

無踏にまとりつかせてくる。

その念力に取り込まれると

恐怖が増大するのだ。

それに取り込まれたら最後、

自分で自分を崩して、

黒い集団に支配されてしまう。

念力は益々強くなってくる。

大集団の念が

ひとつに焦点を結ぶと

ただごとではすまない。

身動き出来ないほどの

圧力がのしかかって来る。

異次元の場所では

ただならぬ状態になっているのだが、

道を通行している人達は

まるで何事もないように、

まったく気付かず

行き交っている。

狐達双方では

睨み合って

膠着状態のまま

時間が経って行く。

手下達が

ボスの体に巻き付いた糸を

寄ってたかってほどいていて、

徐々にほどけてきていた。

ボスが自由になれば

また集団が力を増してくる。

「しつこい奴らに関わってしまったな。」

と無踏は内心不安になっていた。

膠着状態のまま

にらみ合っているうち、

ボスに絡み付いていた糸が

ほどけてしまったようだ。

ボスの興奮した声が聞こえ出して、

手下達は勢い付き、

一斉に声を上げた。

ボスが起き上がって

体の自由を確かめるように

腕や首を回すと

「やるうごも、」

手加減無用だ。

ぶつ殺せ。」

ボスが憎々しげに叫ぶと

「ぶつ殺せ！」。

ぶつ殺せ！」

全体が大合唱になって、

黒い煙りが

黒い集団全体から吹き出し、

場がスモッグのように

霞かすんでしまった。

ボスは手下達を呼び寄せ、

前後左右に

配置した陣形をとった。

そして

ジリジリ

と無踏に迫って行く。

無踏は焦っていた。

先ほどは訳もわからず

手に金色の弓が現れたが、

いつのまにか

消えてしまっていた。

なぜなのだろう。

油断なく身構えながら、

無踏は不思議に思っていた。

突然

「ガルッ」

と唸ると、

ボス狐が

手下達に囲まれた中から、

無踏に

飛び掛かかろうとする

気配を見せた。

蜘蛛の糸が

回転しながら

再び絡みついた。

またもや

ボス狐と手下達が

糸でグルグル巻になった

ように見えたが、

ボス狐が手下達に

蜘蛛の糸を絡ませておいて、

その間を脱け出し、

無踏に飛びかかって来た。

「しずまれ。」

突然、

稟りんとした声が

響き渡ったかと思うと

右手に剣を持ち

左の掌てのひらから光りを放射している

稻荷大明神が

そこに現れた。

そして

掌を黒狐達に向けると

強烈な光りが

あたり一面に照射された。

黒狐集団はその声に

一瞬固まったが、

次の瞬間

強烈な光りに吹き飛ばされると

大混乱になって、

ぶつかり合いながら

我さきに

逃げ惑^{まど}つて

姿を消してしまった。

気がつくと

先ほどの腕の立つ白狐が

稻荷大明神の脇で

かしくまっついて、

その横に

背が低く

目が

ギョロッ

としている白狐が

ちよこんと立っていた。

どこかで見ることが

あるような気がして

しばらく考えていたが

ハッ

と気がついた。

さっき道に捨ててあった

あの紙屑かみくずの中の、

あの目だ。

だとすると、

あのギョロ目が

紙屑に化けて

稲荷大明神に

知らせにいったのか。

なるほど

上手く化けたものだと

無踏は感心しながら

得心した。

第13話 社 (やしろ) (前書き)

編集済みでした。

第13話 社（やしろ）

いままで騒然としていた場所が

打って代わって

静かになった。

髪の毛を高く結い上げ、

眉は

ひと筆で引いたように伸び、

目は切れ長の

一重まぶた、

透き通った肌の

稻荷大明神が

無踏むたつに顔を向けた。

髻まげの周まわりりから

光りが出ていて

宝冠ほうかんのように輝いている。

目元涼しく細面、

鼻筋が通り、

威厳のある

きりっとした顔が微笑んで、

形の良い唇を開いた。

「無踏殿、

驚かれたことと思います。

大変なことに

巻き込んでしまいました

申し訳ございませんでした。

ご助力感謝いたします。

この者は

大納言利三郎だいなごんりきぶさう

と申しまして、

この地方の治安を司るしつかさど

長官をいたしております。」

稻荷大明神が利三郎を紹介した。

「よろしくお願いいたします。」

利三郎が

いかにも律義というように

きちんと頭を下げた。

無踏もつられて

深々と頭を下げて挨拶した。

しかし、

なぜ

私の名前を知っているのだろう。

無踏は不思議に思ったが、

稲荷大明神は

次に丸目の狐に顔を向けて

「こちらは

中納言松之助と申します。

治安副長官を

いたしております。」

と紹介した。

松之助がいたずらっぽく

ニツと笑って

ゆっくり頭を下げた。

あの紙屑に化けたのは

やっぱり

この松之助だったんだな。

憎めないやつだと

可笑しさをこらながら

頭を下げた。

「近ごろ、

社を占拠しようとする不審者が

とみに増えまして、

警戒を強めておりましたが、

兵力増強の直前に

隙をつかれてしまいました。」

稲荷大明神は

少し

表情を曇らせながら話した。

「彼らはお社を占拠して

どうするつもりなのでしょうが。」

私は疑問に思ってたずねた。

「最近、

闇の世界が力を増し、

勢力拡大のための

拠点作りを

目論もくろんでおります。

人間を闇の世界へ引き込むためには

それが好都合なのでしょうね。」

大明神は

穏やかな口調で言った。

「そうでしたか。」

無踏は相づちをうつたが、

闇の勢力にとって

なぜ好都合なのか

よくわからなかった。

稲荷大明神は

遠くを見るような目で

無踏の顔を見て

話しをしていたが、

何かに気づいたのか、

はっと

少し表情が変わって

言葉が止まった。

しかし

すぐ

もとの平静さに戻った。

そして

思いついたように

「無踏殿、

私達の世界を

ご案内いたしましょう。

「こちらへどうぞ。」

と声をかけ、

頭をちよこつと下げて

無踏を促すと

社に向かって歩き出した。

言葉は柔らかく

丁寧で

威厳に満ちた

神々しい雰囲気

抵抗する余地もなく

夢遊病者のように

足が勝手に動き出した。

利三郎狐と、

松之助狐の二匹が

うやうやしく頭を下げて、

無踏に

「おめ、おめ、

いちばんへんじぞ。

ご案内申します。」

と腕を差し延べながら

誘導して行く。

稻荷大明神は

赤い鳥居をくぐると

両脇に鎮座している

狐の石像の間を抜けて、

左のほうへ

ズンズン

進んで行き、

社やしろに向かって行った。

無踏も続いてついて行く。

すると、

扉が観音開きに

サッ

と開いた。

一瞬躊躇したが、

恐る恐る中に入った。

結界けっかいの一部を開いたのだろう。

社の中の暗い雰囲気

イメージしていたのだが、

結界の中は

広々として

太陽がさんさんと輝き、

森の中に道が続いている。

まるで

初夏のような爽やかさだ。

穏やかな微風が

やさしく肌を撫でて行く。

無踏は

稻荷大明神のあとを

二匹の狐と共に

ついて行く。

すると、

足元に

霧のようなものが

渦を巻いて出てきた。

と見る間に

それがモクモクとひろがって、

地面を覆い、

稻荷大明神と

無踏と二匹の狐が

雲の上に持ち上げられた。

「無踏様、

ご安心なされませ。

ここからは

大明神様のお乗り物にて、

ご案内いたします。」

利三郎が

驚いている無踏を

気付かって声をかけた。

稲荷大明神は振り返ると、

にこやかに微笑んだ。

雲は

ふわりと浮き上がった。

どんどん

高度が上がって行く。

そして

上から眺めると

思わず息を飲んだ。

森が見渡す限り

どこまでも続く

広大な原生林が

広がっていたのだ。

異空間に

現実の世界とは違う世界が

存在しているということに

驚いた。

と同時に

あまりに

鮮明な実在感に

目を見張った。

全てが新鮮で

澄んでいる。

好奇心の強い野鳥が

次々近くまで飛んで来て

まじまじと顔を覗いて行く。

目を転じて

森の中に意識を向けると

様々な種類の昆虫が

生活していた。

季節に関係なく

蝶やトンボが飛び交って、

蜜蜂が忙しく

花の蜜を集めている。

左前方の森の中に

芝生の広場が見えて、

何かが集まっている。

意識を集中させると

それが

グーッ

と拡大され、

その場所に入り込んで、

その様子が

手に取るように

理解出来るようになった。

集まっていたのは

狐だった。

行列している集団が

行進を始めると

短い号令ひとつで

次々

隊列が変化して行く。

一糸乱れず

散開したり集合したりしながら

全体が生き物のように

動いている。

そのうち、

集団がいくつかに分かれた。

たぶん

各班別になっているのだろう。

そして

武士の恰好をした集団の一部が

突然

姿を消したかと思うと、

予想もしていないところから

編笠姿の托鉢僧侶集団になって

湧いて出た。

その僧侶達が

錫杖しやくじょうを突きながら

行列して行くと、

他の武士集団が

刀と槍で襲いかかった。

途端に

行列の僧侶達が

さっと散開して

錫杖で

それらを跳ね返して構えると

激しい戦いになった。

他の班集団は

サッ

と退いて、

観戦している。

しばらく

丁々発止ていせいの

せめぎあいになっていたが、

僧侶の一人から

煙りのようなものが

立ちのぼると

ふっ

と姿が薄れて、

消えた。

すると

残った僧侶達からも

次々に

煙りが立ちのぼって

姿が消えて行った。

不思議だ。

妖術なのか。

武士の一団が

一瞬慌てて

隊列が乱れ、

キヨロキヨロ

見回したが、

すぐに

油断なく

辺りの気配を探った。

そして

煙り玉を取り出すと

次々に

火をつけて

投げつけた。

玉は

シューシュー

音を立てて飛んで行くと、

木の影や

丈の高い草むらに

落ちて転がった。

あたり一面、

唐辛子入りの煙りに

燻いぶされた。

嗅覚の鋭い狐達には

耐えられない。

木立や草むらに潜んで

同化していた妖術も解けて

苦しそつに姿を現した。

サッ

と観戦していた集団の中の

審判員らしい数名の狐が

白旗を上げた。

ドッ

と観衆がどよめいて

拍手がなった。

勝負がついたのだろう。

「あれは

武器や戦術と妖術を

それぞれの班ごとに

あみだして

実戦同様の

戦闘訓練をしております。

我々を攻撃して来た

あのボス狐の権左衛門も

ここで学んでおりました。

しかし

自分を他人よりえらく見て、

独善的に関わるために、

どうしても

この仲間と合わず、

波動の同じ闇の世界に憧れて、

ここを

飛び出してしまいました。

そして

そのまま戻って来ることもなく、

闇の言いなりになり、

悪事のし放題に

なっております。」

利三郎が説明した。

「幾度か

説得する機会は

あつたんですがね。

あいつはまるっきり

聞く耳を持たないんです。

どうしようもないです。」

松之助が言った。

ギヤア、ギヤア、ギヤア、

突然、

烏からすの鳴き声が

響き渡った。

二匹の狐が顔を見合わせて

稲荷大明神を見た。

稲荷大明神は

慌てる様子もなく、

無踏に体を向けると

「無踏殿、

また

他の社が

攻撃を受けておりまして、

様子を見に

行かなければなりません。

ここから先は

大納言と中納言が

ご案内いたしますので、

「ゆっくりご覧下さい。」

そう言つと

稲荷大明神の姿が

瞬く間にかき消えた。

第14話 異変(前書き)

編集済みでした。

第14話 異変

テレパシーで

何かを

伝えたのだろう。

異変が生じたことを

伝えているらしいことは

無踏にも感じられた。

「緊急事態が

生じてしまいました

申し訳ございません。

替わりに

私どもが

ご案内いたします。」

大納言が

恐縮しながら

無踏に言った。

礼儀正しく、

気配りの出来る狐に

舌を巻いて

無踏もかしこまって

言葉を返した。

雲のスピードは速く、

すでに

原生林の奥深くまで

入り込んでいた。

しかし

それでも

見渡す限りの樹海が

そのまま続いている。

どこまで

飛んで行くのだろう。

こんなに深い樹海では

出るのも

容易ではないなと思った。

不意に、

雲が速度を落として

ゆるやかに下降し始めた。

上から見ていた森林が

ずんずん

目の前に迫って来て、

雲はその中へ

吸い込まれるように

沈んで行った。

太い樹木が

びっしりと

生い茂っている。

中に入った途端に

方向がわからなくなるほどの

深い森だ。

しかし

上空から見ていたとき

原生林の

とろろどろろに

ひらけた空間があることに

気づいていたが、

木々のすき間を通して

畑らしいものが

見えてきたことに

驚いた。

森林を開墾して

作物を作っているのだろうか。

無踏が

驚いているのを見ると

「わたしらも

畑をやっているんですよ。」

中納言が

可笑しくて堪らない様子で

言った。

まさか。

狐に土を耕せるのか。

半信半疑で

畑を見直した。

「このあたりは

学校も集まっています。」

大納言が言った。

その畑から

少し離れた高台に

広い敷地があつて、

中国風に

振り返った瓦ぶきの

建物が建っているのが

見えて来た。

たぶん

学校なのだろう。

その前の広場に

白衣を着た

教官らしい狐が

十数匹の学生らしい狐を従えて、

植えてある植物を覗き込んで、
のぞ

何か話しを

聞いているようだった。

意識を

その方向に向けると

グーッ

と拡大されて

意識がその中に入った。

「肥料が多すぎて

気分がよくないんです。

こんなに

いつも

おしっこかけられたんじゃ

体の具合が悪くなっちゃうぞしょづ。

いい加減にしてください。」

「そんなに

おしっこ

かけられてるんですか。」

「他の仕事をしていて、

目を離すと

いつの間に

かけられているんだから。

私は肥料いらないの。

いつも言ってるでしょう。」

「申し訳ない。」

大豆さんは

肥料あまりいらないうて

教えてはいるんですが、

おぼえていないのかな。」

狐達が

入れ替わり立ち替わり

おしっこを

かけて行くから

大豆がカンカンに

怒っていたのだ。

霊の存在だから

排尿はないだろうと思うのだが、

肉体意識が

強く残っている者は

排泄感を覚えると、

それが

物質化するのだろう。

狐達が覗き込んでいたのは

大豆の苗だったが、

その大豆が

しゃべるのだ。

そして

それを

その狐達は

聞いて学んでいた。

狐達にとって

大豆は

油揚げの原料になるため、

良い豆を作ることは

重要なことなのだろう

と思った。

密集した樹木の間を縫って

雲がゆっくり

前進して行く。

不意に

目の前が

ぽっかりと開けて

森林に囲まれた

広い芝生の空間が現れた。

はるか前方に

たくさんの狐達が集まっている。

意識を向けると

また拡大された。

五、六十匹の狐が

並んで座っている。

教師らしい狐が

その前に立って

話しをしていた。

「大明神様の

お邪魔にならないように

気をつけて、

素早く

行動しなければならない。

敵は

我らを利用しようと

常に

様子をつかっている。

油断は出来ない。

まず

敵は我らの意識の隙を

どのように突いて

誘惑し騙だますのか

ということを

知っていなければ

ならないのだ。」

生徒の狐達は

真剣に聞いていた。

敵の話しを

しているといふことは

兵法でも

教えているのだろうか。

「敵は

君達が欲しいと

思っているものを

ちらつかせて

誘惑するのだ。

それに釣られて、

ここで学んだ者達の

かなりの数が

闇の軍団の

手先となってしまっている。」

教師は

一同を見回して

話しを続けた。

「これは

ゆゆしき問題なのである。

とじらび、

君達が

常日頃

欲しいと思っているものは

何かな。

それを

知っておく必要がある。

何故か。

自分の弱点を知っておけば、

闇の軍団に

つけこまれることなく

自分を守ることが

出来るということだ。」

教師はここまで言うと

少し間をあけた。

そして

不意に

「君はどうだ。

何が欲しい。」

生徒の一人を指差して

訊ねた。

突然

訊ねられた生徒は

目を白黒させて

「えーつと、

えーつと」

つと慌てて考えたすえ

「人が食べている

ビーフステーキが

欲しいです。」

「おーつ、

そうかー。

そうだろう。

それは私も欲しい。」

教師も目を輝かせて言った。

「先生、

私は人が食べている

ハンバーガーが

食べたいです。」

「そうだなー。

私も食べたいぞー。」

教師は

ますます

目を輝かせ、

興奮して言った。

「先生、

私は分厚くて

とろけるほど柔らかい

チャーシューが

たっぷり入った

豚の背脂たっぷりの

ギトギトラーマンを

食べたいです。」

「そつだ。

それだー。

それも食べたいぞー。」

ひどい興奮状態で、

ごくりと

喉を鳴らした途端、

教師のお腹が

グーッ

と鳴った。

そして

よりいっそう

目をキラキラ光らせて

口から

ポタポタ

よだれをたらした。

突然、

教師は

はっと

我に返って

罰が悪そうに

咳払いをした。

「敵は

このように

私達が欲しいと

思っているものを

出してくる。

これを退けるのは

大変なことなのだ。

これを

ちらつかされても、

それに

動かされない

強い意思を

養うようにしなければならない。

わかったかな。」

教師が言うと

「はい、

わかりました。」

生徒が

いっせいに返事をした。

やはり

食い物なんだ。

しかし、

あの先生のほうが

真っ先誘惑に

負けそうではないか。

無踏は可笑しくて

吹き出した。

雲は

どんどん

前に進んで行く。

雲が来るのを

みつけた子狐たちが

慌てて

草むらに飛び込んで

身を潜め、

不思議そうに

覗いている。

子供がいるのか。

しかし、

肉体がないのに

なぜ

狐の子供がいるのだろう。

無踏は

不思議に思っ

て首を傾げた。

すると

「あれは

事故とか病気とかで

命を失った子供たちで、

それを

ここで育てているんですね。」

中納言が

訝いぶかっている無踏に言った。

へーっ、

そういうことか。

無踏は

感心してうなずいた。

しばらく行くと

突然

森が開けて、

草が生い茂った川岸に出た。

その川は

まるで

海のように水量が多く

滔々（とうとう）と流れている。

向こう岸が

はるか遠くに

かすんで見えていた。

第15話 警戒警報（前書き）

編集済みでした。

第15話 警戒警報

雲は

そのまま

川のところまで行くと、

水面すれすれに

飛び出した。

まるで

ホバークラフトだ。

しかし

この雲の底は

抜けたりしないのだろうか。

無踏に

ふつと

不安がよぎったが、

二匹の狐は

涼しい顔で

何の不安も

持っている様子はなかった。

この雲は

いったい

どのような物なのだろうか。

まるで

操縦している様子もないし、

どろどろって

動かしているのだろう。

無踏は

それらしい動きをしてはいないかと

狐達を見ていた。

しかし、

わからなかった。

雲は水面を滑るように

飛んで行く。

身を乗り出して

下を覗くと、

深く透明な川底が見え、

異常に長く育った

水草がびっしり

生い茂っていた。

その中を

巨大な魚やイルカが

悠然と

泳ぎ回っている。

まるで

水族館だ。

無踏は

しばらく

川の中を夢中になって

覗き込んでいた。

そのうち

雲がふわりと

浮き上がった。

そして、

そのまま

空高く舞い上がると

再び

景色の全貌ぜんぼうが

眼前に

広がるようになった。

上空から眺めると

密林の中を

巨大な大河が

どこまでも

蛇行して延びている。

見回しながら

反対側を見ると、

遙かかなたに

山の連なりがあり、

その方向から

大河の流れが

来ているようだった。

「この異次元も

無限大の広がりをも

持っている

世界だったのか。」

不思議な想いで

目を移すと

上空のあちらこちらに

雲が気球のように浮かんで、

風もないのに

それぞれが

様々な方向に動いている。

見ると

その一つ一つに

狐が乗って飛んでいた。

ここは

雲が乗り物だったのだ。

無踏の乗った雲が

ようやく

幅の広い大河を

越えるあたりまで

進んで来た。

しばらく前まで

遙か彼方に

見えていた対岸が

迫って来て、

その先に

また密林が

見渡す限り続いて見えている。

ビーツ、ビーツ、ビーツ、

「警戒警報発令、警戒警報発令、

不審者発見、不審者発見」

突然、

雲が

警報音を鳴らして

叫んだ。

二匹の狐の顔色が

サッ

と変わった。

その途端、

雲の動きが

ピタッ

と止まって、

くるりつと

向きを変えると、

予想もしなかった速度で

飛び出した。

そして

もと来た方向を

戻り始め、

瞬く間に

大河を飛び越えた。

雲は何かに反応して、

その方向へ

まっすぐ飛んで行く。

大納言と中納言は

緊張した面持ちで

無言のまま

腕組みして

立っている。

無踏もまた、

ただ事でない危険が

待ち受けている場所へ

向かっているのだらうと、

いやがおうでも

緊張が高まってきた。

雲は

森林すれすれのところを

一直線に飛んで行く。

突き出た木の先に

ぶつかりそうだ。

それを

右に左に

避けながらも

速度は落ちない。

上空に上がると

敵からまる見えで

不利になるため、

樹木の先端

ギリギリ

に飛んで行くのだらう。

不意に

コースが右に

反れて行く。

前方に

また河が見えて来た。

大きく蛇行して

離れて行った大河が

そのあたりで

再び

近づいて来ていたのだ。

雲は

その大河の上に飛び出ると、

そのまま

速度も落とさず、

まっすぐ

水面に突っ込んだ。

ドッブーン、

強い衝撃と

大きな水音に

無踏は

慌てて息を止めた。

雲は水に入ると

一気に

深い川底まで沈んだ。

どうなるんだ。

止めた息が続かない。

水面上がろうとしたが

びつたり

雲に貼り付いたままで

離れることが出来なかった。

無踏は

苦しさでもがいた。

間に合わなかった。

溺れたと思った。

しかし

気づくと

水の中にいるのに

息苦しさは

まったく感じられない。

陸上にいるのと

違わなかった。

予想外の出来事に

感覚が

ついていけない想いだ。

川底の水草は

間近で見ると

上から

見ていたときと

比べて

はるかに大きい。

雲はスピードを落とすと、

ゆっくり

水草の茂みの中へ

潜り込んで

川底に着地した。

すると

周りの水草が

ゾロゾロッ

と移動して

広い空間が広がった。

水草の下にいた蟹や虫が

慌てて

隠れ場所を探して

走り回った。

見ると

いつの間にか集まったのか、

そこに

水草の蔭に潜んでいた

甲冑に武器を携え、

楯を抱えた

狐達が

多数現れてきた。

その狐達は

大納言と中納言を

待っていたのだ。

「偵察隊長はいるか。

ロバソンはどこだ。」

大納言が

声を張り上げた。

「はっ、

ただいま。」

ロバソンと呼ばれた白狐が

出てきて

大納言の前に膝まづいた。

「状況はどんな具合だ。」

「はっ、

ここから

十里ほどのところに

砦のようなものが

出ています。」

「皆だと。」

規模はどのくらいだ。」

「大きさは桁外れのものですが、

中が見えません。」

「バリアーか。」

「はっ、

強力なのが張ってあります。」

「そうか、

わかった。」

「しかし、

あそこに

結界を張った出入口が

何かあったかな。」

大納言は

記憶を手繰ってみたが、

思い当たるものは

出て来なかった。

第16話 暗光軍団（前書き）

編集済みでした。

第16話 暗光軍団

大納言は

ちよつと考えてから

「行くぞ。

プルサム隊と

市松隊は正面、

サンダ隊と

偵察隊は上空に待機。

相手から

攻撃を受けたときは

いつせいに反撃する。

以上。

出動開始。」

命令を下した。

「おーっ」

雄叫びを上げると、

雲に乗った狐の兵士達が

次々

川底から飛び出して

原生林の上を

凄いスピードで

飛んで行く。

どのくらいいるのだろう。

川の中では

はつきりしなかったが、

外に出てみると

その数は非常に多い。

大量の小雲が

群れをなして、

一つの方に

吸い寄せられて行く。

無踏の乗った雲は

目が回るようなスピードで

密林の上を

かすめて飛んで行く。

全景はグングン変化し、

大河は遙か後方に

離れて行く。

のんびり飛んでいた鳥が

ぶつかりそうになり、

必死の形相で

羽根をばたつかせて

避けた。

雲は

場所を掴んでいるらしく

迷いが無い。

瞬く間に

岩が見える場所に

到着した。

「スゲー。」

無踏は興奮して

完全に舞い上がっていた。

その途端、

乗っていた雲が

スーッ

と萎^{ほじ}んで消えてしまった。

「あつ、

消えちゃった。

どうなるんだ。

逃げられなくなる。

大丈夫なのか。」

無踏は

急に

不安になった。

しかし

もうこうなった以上

逃げることは

出来ないだろう。

しかたがない。

覚悟を決めるしかなかった。

思い直して

前方の砦を見た。

距離が離れていても

巨大だ。

瓦の乗った

反り返る大門の屋根は

見上げないと見えない。

ゴツゴツ

した高い岩の壁が

一面に立ちはだかつて、

無数の銃眼が

ところ狭しと開いている。

他の白狐兵士達も

距離を置いて

遠巻きに

待機している。

この辺りは

森の中に幾つもの

曲がりくねった道があり、

それに沿って

藁葺屋根わらじの

小さな家が

軒を連ねているが、

住人は逃げてしまったのだろうか。

閑散として

姿が見えない。

砦の周囲には、

黒狐兵士達がたむろしている。

濁って動きのない目が、

無表情で

変質的な異常性格を

表していた。

あらためて

黒狐をよく見ると

単なる黒ではなく、

汚れて

光を失った

霊体から出るオーラが

暗い光の

斑尾まだひ模様になっていた。

そして

全員がそれぞれ

違った斑尾なのだ。

暗光狐だ。

しかし

餓えて

痩せさらばえた暗光狐達は

食い物はないかと

あちらこちら

物色して、

それらしいものを見つけると

いつせいに飛びかかった。

一部分に動きを感じた途端、

全員が

その方向へ

わっ

と押し寄せるので、

そのつど

集団が波になって、

右に左に

揺れ動く。

そして、

そこは

即座に

激しい殺し合いの場となった。

砦の大門は

閉まったまままで

中の様子が

まったくわからない。

これはどう見ても

友好的な相手には

見えなかった。

どんな奴らなんだ。

手強い相手に見えるが

一拳に蹴散らして

追いつくことは出来るのか。

どこを攻撃したらいいのだ。

ボスはどこにいる。

大納言は

相手の動きを

しばらく窺うかがっていたが、

全員が

この場の雰囲気

慣れてきたであろう

頃合いを見計らって、

そろそろいいかと

思った。

どう出て来るか、

相手に姿を見せてみるか。

大納言は

右腕を高く上げて

前方に降り下ろした。

無言の号令一下、

雲を降りた地上軍団は

音もなく

ゾロリ

と暗光狐達の前に

姿を現した。

「出たぞー！」

「やつらだ。」

「皆殺しにしろー。」

「全員生きて返すんじゃないねえ。」

「殺せー。」

殺せー。

殺せー。」

殺意むき出しで

興奮した暗光兵士団は

けたたましい

笑い声を響かせながら、

我先に押し寄せて来る。

一瞬にして

異常興奮の熱気が

渦巻くカオスと化して

沸きかえった。

ふと、

その中から

無踏は

異様な圧力を感じた。

刺して来るような

妙な力が

まとわりついて来る。

集団の中でも

波動を

出しているところはわかる。

いた。

「あいつだ。」

前傾姿勢で

身動きもせず、

ジトーン

と粘りつく視線を

無踏に向けていた。

「何で

俺を見ているんだ。」

無踏は

気味悪さに

ゾクッ

と鳥肌が立った。

しかし、

よく見ると、

それは狐ではなかった。

霊体に光はなく

闇のオーラに包まれた

人間だ。

一際大きな

その男は

無踏から視線をそらさない。

頭から鋭い角がとび出て、

皮膚が

ゴツゴツ

したワニ革のようだ

硬く

体中に

固い刺とげが生えている。

「あいつは俺を知っているのか。」

不気味な想いで

無踏は思った。

白狐軍団は

悠然と

この状態を眺めていた。

「あつ。」

不意に

何かの残像が

目の中をよぎった。

反射的に

体が動いた。

その瞬間、

ビュッ

と音がした。

何が起きたのだ。

バツ

と周りの兵士達が散った。

無踏もその位置から

跳び退いた。

身構えながら

見据えると、

そこには

抜刀した

屈強な暗光兵士が

腰を落として

次の攻撃に

移ろうとしている

ところだった。

こいつは人間だ。

しかし

人とは思えないほど

容姿は変化している。

誰を斬るつもりだったんだ。

大納言か俺か。

油断は

していないつもりだったが、

油断があったのだろう。

そこを突かれた。

大門の屋根から

飛んで来たのだ。

刀が

大納言の耳の縁を

かすめていた。

反射的に体を交わし、

バツ

と横に跳び退いた。

危うく

首をはねられる

ところだった。

即座に

白狐軍団が

いっせい攻撃に出た。

上空から

矢が

雨のように降って

暗光軍団を射抜く。

そこへ

地上軍が

抜刀して

突っ込んで行った。

うおーっ、

全体が

唸り上げる

怒涛の流れとなって

激突した。

ジャキン、

ジャキン

と剣を打ち合い

楯で受ける音、

怒声が

地鳴りともに響き渡る。

戦闘は激しさを増して行く。

無踏にも

攻撃の手は延びて来た。

戦闘に加わるしかない。

ジュジュジュン、

胸のところに巣を張っている

金色の蜘蛛が

警戒音を発しながら

光りの粒を投げた。

それが

ツーツ

と無踏の

両腕の中を飛んで行って

両手の先に

スツ

と吸い込まれた。

時間にして

一瞬だ。

ビュッ、

鋭い音がした。

第17話 刺客(前書き)

編集済みでした。

第17話 刺客

ガキーン。

降り下ろされた剣と、

無踏の両手に現れた

六角棒で受けたのが

同時だった。

体が

強烈な衝撃で

後ろに吹っ飛ばされて

コロコロッ

と転がった。

受けていなければ

真っ二つに

なっていたところだ。

無意識に体が動いた。

といつより

何かに操られて

動かされた感じがした。

無踏は一瞬

頭が空白になったが、

それどころではない。

二の太刀、

三の太刀が

唸りを上げて

追いかけて来る。

殺気が

空気を斬り裂く。

転がりながら

夢中で

六角棒を振り回した。

ガギーン、

ガギーン、

ガギーン、

相手の無表情な目は

無踏一点に

定められて

執拗に

斬りかかって来る。

こいつが狙っていたのは

俺だったのか。

刺客か。

なんで

俺が

狙われなくちゃならないんだ。

剣を必死に避けながら、

思いもよらぬところで

自分の命が狙われていたことに

薄気味悪さと、

何ともいえぬ

嫌な気分がして、

納得出来ない理不尽さに

怒りがこみ上げて来た。

大納言達は

無踏の様子を

横目で見て

助けなければと

思いはするが、

いかんせん

間断なく

次々に斬りかかって来る

眼前の敵に

応戦するだけで

精一杯だった。

無踏は

転がりながら

六角棒を振り回して

剣を交わしていたが、

ちよつとした

間合いの隙に

サツと立ち上がった。

それを

見逃すような

刺客ではない。

「そこだ。」

冷たく光る切っ先が

鋭く突き抜いた。

あっ、

しまった。

無踏が

思った瞬間、

目の前の敵が

フッ

と消えた。

えっ、

どうなった。

呆然としたが、

めまいの残る中で

気づくと

空中を飛んでいた。

いつの間にか

金色蜘蛛が大きくなって、

長い足が

無踏の体からはみ出ている。

蜘蛛は

あらかじめ

巨木の高い枝と根元に

糸を

念の力で

貼り付けておいた。

そして

剣が体に突き刺さる

直前に

糸を強く手繰って、

バンッ

と根元の糸を切った。

その弾力で

無踏の体が

勢いよく

飛び上がったのだ。

蜘蛛は

自分の体の大きさを

自由に

変えることが出来るのだらう。

無踏は高い枝から

蜘蛛の糸に

ブラインと

吊り下がった状態で

下を見た。

それぞれの軍勢が

豆粒のように見える。

そこは

大津波と大津波が

激突したような

騒ぎになっていた。

あの刺客が

必死に

無踏を

探しているのが見える。

闇の者は目が暗く

視力が劣っているのか、

上にいることに

気づけない。

周りには

斬られて

転がっている犠牲者が

双方に

多数出始めていた。

勇敢な白狐軍は

やや優勢で押しはいるが、

なかなか

攻撃の成果を

出せないでいる。

戦っている暗光兵士は

決死隊として

バリアーの外へ

出されてしまったために、

皆へ逃げ込むことが出来ず、

生き残ろうと

死に物狂いの

特攻兵となっているのだ。

白狐軍団は

苦戦を強いられている。

中納言は

倒しても倒しても際限なく

新手の兵士が

鬼の形相で

突っ込んで来るために、

無踏に

意識を向ける

ゆとりもなく、

どうなっているのかさえ

わからなかった。

無踏は皆に目を移した。

巨木の上方から見ると、

天井はなく

上は開いている。

バリヤーが張ってある

砦の中は薄暗く、

奥は真っ暗だ。

蜘蛛は何を思ったのか。

先端に

光る粘液の珠が

ついている

細い糸を

足で引き出した。

それが

スルスル

と下へ垂れて行くと、

途中から

強風に煽られたように

珠が

ふわりと

浮き上がった。

そして、

そのまま

ずんずん

砦の方向へ

伸びて行く。

蜘蛛の念が

糸の先端の珠を浮かせて

移動させているのだろう。

糸は電線のように

緩やかに

たわんでいるが、

珠は一直線に伸びて行く。

バリヤーで弾かれるのに

何をしているのだろうか

不審に思いながら

成り行きを見ていた。

第18話 投石（前書き）

編集済みでした。

第18話 投石

蛛の金糸が

キラキラ

光りながら

伸びて行く脇

すれすれ

のところを

上空から

狐の乗った雲が

次々急降下して

弓を引き絞り、

矢を連射して

上昇して行く。

的を外れた

一部の矢が

バリヤーに当たって

跳ね返される。

全体から

剣を交える音や

叫び声が

轟音となって

響いて来る。

白狐軍は

飛行隊の援軍を受けて

暗光軍を

ジリジリ

と追い詰めてはいるが

敵も背水の陣だ。

死に物狂いで

戦っているために、

なかなか

押しきれない。

プルサム小隊長は

テレパシーで雲を呼んだ。

その瞬間、

足元に

雲が巻いたかと思つと、

一気に

上空へ

舞い上がった。

上から見ると

軍団と軍団の戦いは

巨大な

兵力同士の

激突となって

真っ黒なスモッグが

立ちのぼっている。

この世界では

テレパシーで

情報伝達するため、

軍団を

細かく組織化しなくても

隊長が個々に

直接

指示を伝えることが出来る。

そのため

現場は小隊だけで

十分だったのだ。

そのかわり、

小隊と言っても

兵士の数は

大隊に匹敵するほど多い。

プルサムは

戦況を眺めた。

最前線は

敵味方

入り乱れて

死闘を繰り広げ、

戦っている者が

力尽きて倒れると

新手的戦闘要員が

サッ

と前に出て来る。

後ろから

押し寄せて来る

元気な要員を叩けば

戦力を

そぐことが

出来るのではないか。

すぐさま

ブルサムは

後方に

待機させていた

投石隊に

合図を送った。

味方に当たらないように

距離を

テレパシーで送る。

投石器は

太い原木を組んだ土台に、

丸太を放射状に

組み合わせた

横幅のある

輪になっている。

それはまるで

水車のような。

その輪の土台の横に

手回しのハンドルが

付いている。

狐達は

そのハンドルに

取り付けてある

取っ手を掴んで

回し始めた。

ギリリ、

ギリリ、

ギリリ、

音からすると

ゼンマイを

巻いているのだらう。

輪の外周には

それぞれの

丸太の頭が

輪の幅に並んで

歯車のような形に

突き出ている。

こんな物で

何をしようというのか。

無踏は

興味を惹かれて

見ていた。

ゼンマイが

長くて

強力なのだろうか。

巻くのに時間がかかったが、

狐達は巻き終わると

床下から出ている

角材の

ブレーキレバーを

動かした。

丸太の輪が

ゆっくり

回転を始めた。

そして、

もうひとつの

木のレバーを

次々

動かして

歯車を切り替えている。

回転が

ドンドンドン

上がって、

終いには

ブンブン

唸り上げる速さになった。

プルサムは

ここだという

頃合いを見計らうと

「打て」

テレパシーで

号令をかけた。

すると

上空に

静止していた

さつま芋のような形の

雲の中から

大きい石が

連続して

輪の外周の

突起めがけて

落下し始めた。

カーン、

カーン、

カーン、

ゴツゴツ

した石が

突起している

丸太の頭に

当たって

次々

空を飛んで、

敵の中へ

ドカン、

ドカン

落下して行く。

無踏は

高い枝から

吊り下げられたまま

投石器から

打ち出される石を

見ていたが、

ふと、

わざわざ

器械で打ち出さなくても、

敵の上空で

雲から

直接落とせば

手間が省けて

いいんじゃないのか

とも思った。

敵軍は

蜂の巣を

突っついたような

騒ぎになった。

しかし、

しばらくすると

すぐに

馴れてしまって

大石が飛んで来ると、

落下地点を

予測して

即座に

避けてしまっ。

「ふん、

こんなへなちよこ玉なんか

当たりやしねえや。」

トマリ、

トマリ

と簡単に

石を交わしてしまっ。

暗光狐は

暗く

鋭い冷酷な目に、

なめきつた光りを

滲ませ、

歪めた口で

嘲笑った。

敵を倒すのは

なかなか大変だ。

しかし

だんだんと石の量が増え、

大きな石が

雨あられのように

降って来るように

なつて来た。

不敵に

嘲笑っていた

敵の狐達も

笑いが消え、

顔色が無くなって

必死に

逃げ惑いだした。

なるほど、

無踏は感心した。

投石器を使うと、

どこへ飛んで行くか

分からないし、

落ちる場所を

ばらつかせることが

出来るのだ。

それに

調節すれば

飛ばす石の量も

相手の

状況次第で

変化させることも

出来ると

いうことだ。

よく

出来ているものだと

無踏は感嘆して

投石器を

眺めていた。

その途端、

ドガン、

先ほどから

一段と

偉そうに

馬鹿にして

虚勢を張っていた

暗光狐の頭が

でかい石になったのかと

思うほど

一瞬だった。

頭が

大きな

石の直撃で

地面にめり込んで、

ピン

と手足が硬直して

突っ張ったままの

胴体が逆さまに

突っ立っていた。

うわーっ、

周辺の狐達は

慌てふためいて

飛び退き

逃げ回った。

一方、

伸びて行く

蜘蛛の糸の

先端が

何かに

阻まれて

止まった。

そこが

バリアーの壁

なのだろう。

先端の

光りの珠が

透明な壁に

プツリ

と食い込んだ。

すると

粘膜の珠から

壁の中へ

バチバチ

音を立てて

強い

光りのエネルギーが

放出された。

それが

稲妻となって

バリヤー

の表面を

這って行く。

今まで

見えなかった形が

稲妻によって

皆全体を

覆っている

饅頭のような

ドームとなって

浮かび上がった。

しかし

反応が

あるのかないのか、

うんでもなければ

すんでもない。

びくともしない！

相当強力な

エネルギーの持ち主が

結界を張ったのだろう。

すると

蜘蛛は

次々

糸を伸ばして

バリヤーの

上から下まで

数十本の糸を

食い込ませた。

そして

先端の珠から

いっせいに

エネルギーを

放出させた。

さすがに

反応の鈍く見えていた壁が

ビリビリ

と振動し始め、

そのうち

稲妻で

埋め尽くされた

バリアーの壁

全体が揺れ出した。

じばらく

ビリビリ

していたものが

段々と

大きくなって、

まるで

ブリンが

揺すられたときのよつぱ

ブルン、ブルン

と波打っている。

振動が

どんどん

酷くなる。

バリヤーは

意志を

持っているかのように

破られまいと

必死に抵抗する。

バリバリバリ、

稲妻が

怒りの音を

立てて

プリンを破壊しようと

躍起になって

挑んで行く。

攻めと守りの

せめぎあいだ。

無踏の体にも

強烈な

電圧がかかって

耐えられないほどの

感電の痺れと硬直で、

あーっ

と口を開いて

白眼を剥いたまま

固まった。

いつまで

この痺れが

続くのだ。

早く終わってくれ。

無踏は

グラグラ

目を回しながら

祈る思いで耐えていた。

第19話 ドーム(前書き)

編集済みでした。

第19話 ドーム

必死に抵抗を試みている

ドーム型のバリアーの振動が

益々激しくなって、

ちぎれそうになってきた。

「あー、限界だー。」

悲痛な叫びが

聞こえて来るような気がしたとき、

ビッ

と突然亀裂が入った。

途端、

パツシャーン、

巨大なシャボン玉のようなものが

真っ二つに割れて、

それがテツペンから

ボアツと両側に分かれ、

幕が下へ縮まるように

落ちて消えた。

「あーっ、」

一瞬

全員がそれに気を取られて

時間が止まったような感じになった。

何が起こったのか。

それと同時に、

いままで

バリヤーに弾^{はじ}かれていた

石と矢が

次々砦に届くようになった。

後ろへ下がらせなくさせていたものが

無くなったために、

戦っている暗光狐達は

どンドン押されて

大門のそばまで後退した。

しかし

門は開けられる様子もなく、

非情なまでに冷たく

閉ざされたままだ。

退却することは

許されていないのだろう。

結界は解けた。

「大門に火を掛ける。」

大納言はここぞとばかりに

サンダ小隊長に命令した。

即座に

サンダ隊数十の隊列は

矢じりに油を含ませた

矢の束を積み込んだ雲に乗って

上空へ飛び立った。

そして

一列に連なった曲線を描いて

大門に急降下すると

油壺から火矢を引き出し

松明^{たいまつ}で点火すると

次々

射放つて急上昇して行く。

そして

上空からまた急降下する。

まるで

火の玉を連射する

数十の籠が交錯して

襲いかかっているようにも見える。

炎が尾を引いて

大門に吸い込まれ、

タンタンタンタン、

と乾いた音をたてて

次々に矢が突き立って行く。

積み込んだ矢束を

すべて射尽くす勢いで

機関銃のように

連射している。

火がメラメラと板に燃え移って

広がって行く。

「あーっ、」

敵方から

どよめきが沸き上がった。

瞬く間に

火は勢いを増し

ゴーゴー

と音を立てて

炎を噴き出した。

煙と火炎が

天高く立ちのぼり、

櫺^{けぢき}の玉目^{たまめく}の重厚な扉が

炎を噴き上げて

瓦葺^{かわらけ}きの屋根にまで

火が回るのは

あっという間の出来事だった。

炎は情け容赦なく

勢いを増して行く。

突然、

ギギギーッ、

錆び付いた重い扉が

軋きしんだ音を立てて開いた。

いままで鳴りを潜めていた

砦の主だが、

門が燃え落ちそうな

火の勢いに観念したのか。

それとも

焼かれた門を破られて

受け身で応戦する惨めさを

避けるためか。

恐る恐る

細めに開いた観音開きの扉が

次の瞬間

勢いよくバーンと

木っ端微塵に吹き飛んだ。

残骸が宙を舞う中、

隔てるものなくなった

むき出しの砦の内側に

無踏は緊張した面持ちで

目を凝らした。

どんな凄い奴らが

出て来るのだろうか。

しかし

真っ暗な闇が広がっているだけで

何もない。

砦の中は単なる闇だけだ。

本当に何もないのか。

結局

闇の兵士はこの外で戦っていた者達

だけだったのか。

なんとも気抜けした感じと同時に

疑心暗鬼で

敵の姿を巨大化していた愚かさ

に可笑しさがこみ上げて、

思わず力が抜けたように感じた。

その瞬間、

ズドドーン。

岩を囲っていた高い壁が

轟音と共に土煙を上げて崩れた。

土埃ちいぼが一面に立ち込め

視界たえんが遮られて、

暫くの間見通しが利かなかったが、

そのうち、

ぼーっと、

スモッグだか霞かすみだかわからないものが

現れてきた。

そして

その薄闇の中に

無踏は異様なものを見た。

何んだろっ。

意識を集中した。

すると、

煤汚れた薄闇の中に

無数の影が片膝をついたまま

びっしりと

隙間無く詰まっているのが

はっきり見えてきた。

それも半端な数ではない。

薄暗い中に

真っ黒な頭が

隙間無く敷き詰められ、

そのひとつひとつの目から

めらめら

と憎しみの赤い炎が

燃え上がって光っている。

「出たーっ。」

全員が戦いを忘れて

茫然と固まった。

第20話 援軍（前書き）

編集済みでした。

第20話 援軍

しかし

それは狐ではなく、

人間だった。

表情が乏しく

不気味な暗い雰囲気

漂っているところを見ると、

好ましい連中ではないことは明らかだ。

崩された壁の中には

一本の木々も無く、

ただ

光りの乏しい薄暗い赤茶けた砂漠が

広がっているだけだった。

次元の異なる空間なのだろう。

その中に隠れていた姿そのままの

うんち座りで

何が起きたのか理解出来ず

キョトン

とした顔で固まっていたが

あまりにも間抜け過ぎる。

コソコソと

隠れているところを、

突然

むき出しにされて

格好のつかない惨めさと情けなさに

居たたまれない気持でいっぱいだろうと

意地悪く思ったが、

見たところ

バツの悪そうな様子などは

微塵もない。

何も感じていないのか、

無表情で何事もなかったかのように

一人がスッと立ち上がった。

それにつられて周囲の者が

ゾロゾロッ

立ち上がると、

それが

連鎖して波のうねりのように

ザーッ

と全体が立ち上がった。

不気味なほど静かだ。

それにしても

何か妙だなと

無踏は違和感を感じたが、

しかし、

連中はそんなことには

まったくお構い無しに

ザッ、ザッ、ザッ

と歩調を合わせて

移動を始めた。

前進して来る。

動きに躊躇がない。

無踏が蜘蛛の糸にぶら下がったまま

上から見ていると、

全体が

一つの生き物のように

動いているのだ。

それは

まるでアメーバの触手だ。

白狐軍の両側面へ回り込んで行く。

そのまま包み込んで

一拳に呑み込もうとしているのだろうか。

こいつら誰かに操られているな。

だとすると

操っているやつは

この中のどこかにいるはずだが。

無踏は意識の触覚を怪しいと

思われるところへ差し込んで

探りを入れてみた。

しかし

感知出来なかった。

暗光狐達は援軍が現れたことで

勢いづいた。

今の今まで

全滅の危機に瀕^{ひん}していたのだが、

強力な本隊が

合流するということになれば

百人力だ恐いものはない。

「どうだ。

ぞまあみやがね。

てめえらの敵^{かな}う相手じゃねえぞ。」

先ほどまでの

意気消沈して青ざめた姿はどこへやら、

うって変わった傲慢な態度で

虚勢を張ると

肩を怒らせた。

しかし

前へ出て来る本隊を見ると

それぞれが

様々な国と時代の姿をしている。

携たずさえている武器も様々だ。

刀や剣に戟ほこ、弓、鎌かま、

それに棍棒こんぼう、

それも

鉄器、青銅器、

おまけに石器までもがある。

「なんだこれは。」

まるで寄せ集めだな。」

適当に寄せ集めて、

にわか仕込みで作った軍隊では

たいしたことはないなと

無踏は相手を軽んじる想いが

湧いてきた。

これほどの

巨大な砦を造る力のある者が

こんなにも

お粗末な軍隊しか持っていないのか。

おまけに

最前線は狐の兵士にやらせておいて

様子を見ていたのだろう。

なんだかやることがセコい気がして、

裏で操っている者の

姑息こんくな卑劣さに呆れて

蔑たげむ想いが心を占めた。

またもや白狐軍は

新手の軍団と激突する破目に

陥ったのだ。

再び

剣戟けんげきの音が激しく響き渡った。

一進一退で

互角に渡り合っているように見えていたが、

そのうち

白狐軍の犠牲者が増えてきた。

暗光軍は恐れを知らない。

というのか

意識を支配されたまま

意志を奪われて

自分が無くなっているのだろう。

機械的に前進して来る。

無言で

斬られても斬られても

後ろへ下がらないが、

相手に襲いかかるときに

発する気合いは

恐ろしく大きい。

相変わらず

石が雨アラレのように降って来る。

しかし

隣で戦っている仲間が

突然それにぶち当たって、

ふっ飛ばされても

まったく意にかえさない。

無駄な動きもなく

的確に相手を斬り倒して行く者。

石斧を両手に振りかざし、

身のこなし素早く

攻撃を皮一枚で交わして

一瞬で相手を倒す者、

槍を風車のように

ぶん回したかと思つて、

突き出されたのがわからないほど

早い技で襲いかかる者、

無踏は見ているうちに

馬鹿にしていた想いが

間違っていたことに気付いた。

これは

達人と言ってもいいほどの

武者者の集団だったのだ。

白狐軍が押されて

後へ下がって行く。

暗光軍が白狐軍の両側に伸びびて

回り込んで行く。

突然

暗光軍の中央が

左右に開いた。

「おやつ」

と訝^{いぶか}る間もなく、

パパパパパパーン、

乾いた破裂音が

連続して鳴り響いた。

途端に白狐達が

バタバタバタッ

と倒れた。

見ると軍団の後方に

火縄銃の隊列が

照準を合わせて

次の射撃体勢をとっていた。

あらかじめ鉄砲隊を

潜ませておいて、

その弾丸を通すために

中央を開いたのだ。

銃撃隊は撃ち終わると

すぐさま

後ろで準備して控えていた者達と

入れ替わる。

そのため

弾丸は途切れる暇もなく

飛んで来る。

白狐軍は慌てて

樹木の陰に身を隠した。

敵は広大な砂漠に

大軍団を展開させている。

白狐軍を撃ち破って

一気に

雪崩れ込もうとしているのだ。

想像を遥かに超える大軍だ。

これを撃ち破るには

どうしたらいいのだろう。

いい知恵はないか。

大納言は考えを巡らせた。

第21話 総攻撃（前書き）

編集済みでした。

第21話 総攻撃

しゃがむようにして

潜んでんでいた

暗光大軍団が

ザーッ

と立ち上がったとき、

白狐軍は息を呑んだ。

思いもよらぬ兵士の数に加えて、

使い込んだ傷だらけの甲冑から

角の生えた

モジャモジャの頭、

耳まで裂けた

真っ赤な唇から牙、

痩せ細り目の窪くぼんだ

骸骨のような顔が出ている容姿が

目に入って来たからだ。

全員まんじんそつゐが満身創痍そつゐなのだが

へらへら笑っている。

どう見ても明らかな狂気だ。

「殺せれー」

誰かが叫ぶと、

一拳に殺気が噴出して、

すぐさま

敵の総攻撃が始まった。

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

地響きと土埃を卷上げて、

今まで無言だった暗光軍から

ゴ
ー
ッ

と地鳴りのような嬌声きょうせいが

上がった。

「ウガー、

てめえら

一匹残らずわしらの餌にしてくれるわ。」

牙を光らせ

ガラガラした太い声で吠えると

武器を振りかざし、

突進して来た。

「つまそつじゃねえかー。」

「食いてえー。」

「待ってるー。」

今すぐ食って差し上げましょう。」

口々に狐達をからかって

辱^{はすか}しめると、

それが可笑しいのか、

興奮した加^か虐^げの馬鹿笑いが

ドツと上がった。

狐達は厭^{いと}な気分を引きずりながらも

負けずに気持ちを立て直すと

受けて立った。

剣と剣の打ち合う音が激しくなる。

しかし、

暗光兵士が薄笑いを浮かべながら

剣を数合か交わすだけで

白狐達の体は斬り倒されてしまう。

石器の兵士は

両手に持った棍棒こんぼうを

ジャグラーのように

自由自在みまじに操さって

ガツン

ガツン

狐の頭を打ち砕いて行く。

八つ裂きにされ、

頭を砕かれ、

斬り殺されて、

白狐軍は

あっという間に

押し戻されてしまった。

暗光軍はかさにかかって

白狐軍に襲いかかる。

拙^{ます}い状態になって来た。

いよいよ

軍団が総崩れになって

退却かと思ったとき、

ドン、ドンドン、

ドン、ドンドン、

ドン、ドンドン、

あたりの空気をビリビリ振動させて

大太鼓の音が鳴り響いた。

つと、

白狐軍の後方に

黒い頭巾すきんを

すっぽり頭かぶから被り、

黒い筒袖つっそで、黒袴くろはかま、

腕こてに籠手、足すねあてに臙当、

全身鎖帷子くさりかたびらの集団が現れた。

どこから出て来たのか、

見ると

先ほど訓練していた

あの狐達だ。

隊列を組んで行進して来る。

十人一組になっでいて、

それが百組ほどで構成されている。

黒ずくめの隊列が出揃ったところで

太鼓の音が止まった。

と思つと

サツと

周辺の樹木の中に散開した。

そして

それぞれが背負っている物を下ろした。

キビキビとした早い動きだ。

そのうちのいくつかの組が

何か筒状の物を

木々の幹に蔓つるでくくり付けた。

すると

他の組が袋から

中の物を取り出すと、

素早く

筒の中に放り込んで火をつけた。

ダダーン、

ダダーン、

ダダーン、

ダダーン、

立て続けに打ち出された玉は

味方の頭上を越えて

敵の中へ落下すると、

連続して炸裂し

暗光軍兵士達が

赤や青や黄色の星が広がる

花火と共に

空中へ飛ばされ

舞い上がって行く。

花火は次々撃ち込まれて、

不意を食らった敵は

大混乱になり

右往左往するばかりで

対処不能に陥ってしまった。

すると

今度は

花火と交互に

黒い玉が炸裂するようになった。

あたりは一面霞かすんで

見えなくなるほど

粉が舞った。

敵兵は目と鼻を押さえて

苦しそくに咳き込みながら

かるうじて戦っている。

辛子玉だ。

唐辛子や胡椒などの

細かい粉が飛び散る爆弾だ。

敵兵士の動きが鈍くなった。

頃合い良しと見たのか

「突撃」

鋭く短い号令がかかった。

瞬間、

鎖帷子の一団が

フッ

と消えたかと思うと、

突然、

敵中に現れた。

慌てた兵士が目をしよぼつかせ、

顔をしかめて

斬りかかって来る間をすり抜け、

剣を斜め上段に構かまえた鎖帷子が

走り抜けながら

袈裟懸けさがけに

首を狙って斬り込んで行く。

辛子の刺激で目を押さえて

戦意を喪失している者に

勝ち目はない。

狐を馬鹿にして

侮^{あなご}っていた暗光軍は

呆気なく

総崩れになってしまった。

「引けー、

引けー」

退却の命令が響き渡った。

その途端、

アミーバが

慌てて食手を引っ込めるように、

時空全体が

砦の穴に向かって

吸い込まれ始めた。

そして

勢いを増して行く。

みるみるアメーバの体は縮まって行って

最後の薄汚れた砦の大門が

ひっくり返るようになり込んで

穴の中へ入り終わると

ぷつと

閉じて消えた。

あとは

何事もなかったかのように

元の風景に戻っていた。

第22話 宮殿（前書き）

編集済みでした。

第22話 宮殿

ぶら下がっている糸が

ツーツと

伸びて

無踏はゆっくり

下へ降りて行った。

雲が傷ついた者や

倒れている者の上に

覆^{おお}い被^{かぶ}さって

吸い上げると、

次々

飛び立って行く。

騒然とした中、

大納言と中納言が無踏を見つけて

走り寄って来た。

「無踏様ご無事でしたか。

心配しておりました。」

大納言が安堵した様子で言った。

「まったく

ひでえ奴らです。」

どうして

こんな

無茶苦茶なことをするんだろつ。

しかし最近、

特に不法侵入が

頻発するようになって

しまいました。

何が原因なのか

困ったものです。

でも

我が軍団は

あんな者にはビクともしやしませんよ。

奴らぶつたまげて

泣きながら逃げて行きましたぜ。

ざまあみやがれってんだ。」

中納言が興奮状態で

嘲^{あは}るように言った。

だいぶ舞い上がっているなと思いつつながら、

無踏が目をやると

心なしか中納言の背丈が

少し縮んだような気がして、

おかしいこともあるものだ

不思議に思いながら

「しかし、

このように

結界が張られている場所でも

侵入されるんですか。」

無踏は半信半疑で尋ねた。

「そうですね。」

どこの世界にも信じられないほど

力のある奴がいるもんなんです。」

中納言がしたり顔で言った。

無踏は受け答えしながらも、

ここ数日

どう考えても

現実ではありえないことが続いて、

実際のところ

意識がついて行けない状態で

混乱していた。

まさか、

ずっと

夢が続いていて

醒めないままなのだろうか。

そうだ、

夢に違いない。

しかし、

そう思おうとしたが、

自分を

凍るような冷たい目で

凝視していた、

あの鎧よろいのような

硬かたい皮膚に覆われた

得体の知れない男の視線が

はっきりと心に残っていて

気味悪く、

現実感があつた。

「もう大丈夫です。

あらためてご案内いたします。

どうぞお乗り下さい。」

大納言の声で

我に帰ると

雲が足元に巻き付いて

体が浮き上がった。

そして

再び原生林の上に出た。

明るい陽の光りが

燦々(さんさん)と降り注ぎ、

この場所が

邪悪な者達に

荒らされよじとじていたことが

嘘のように穏やかで

落ち着いた景色が輝いている。

雲は一直線に

一つの方角に向かって

飛んで行く。

「あいつら、

どこの奴らなんだか。

結界を破って入って来るんだから、

よほど力のある奴に違いないが、

目的はなんだろう。」

中納言は

誰に言うでもなく言って

ちょっと想いを巡らせてみた。

しかし

思い当たることも無く、

考えても無駄だと

頭を切り替えた。

「だけどもあ、

あれだけ力があったも

簡単に叩き潰すことが出来る

われわれの力は

たいしたもんだ。

どんな奴らが攻めて来たって

びくともしませんよ。」

中納言は

地獄から湧き出た大軍団の恐怖が去って

ホッ

としたのと同時に、

それを撃退した誇らしさで

感情が高ぶって

饒舌になっているのだろう。

威勢のいい自分の言葉に酔って

同じことを幾度も繰り返した。

中納言の背丈が

また一段と低くなってきた。

大納言はしょうがないなと

うんざりした顔で

黙って聞いていた。

「しつ苦労さま、

大変でしたね。」

不意に澆刺はじとした

明るい声が聞こえて来て、

ハッ

とした。

どこから声があったのだろうか

見回した

その途端、

にこやかに微笑んでいる

稲荷大明神の姿が

目の前に浮かび上がって来た。

大納言と中納言は

稻荷大明神を見ると

安心したのか

パツと

表情が輝いて元気になった。

「無踏殿、

酷い目にあっひどてしまいましたね。

恐ろしい想いをさせてしまいました。

申し訳ありません。

大丈夫でしたか。」

大明神は済まなそうに言った後、

二匹の狐に顔を向けて

「大納言、

中納言、

本当によく頑張りましたね。

感心しました。

あの者達は大変な強敵で、

今までに

幾度となく結界を破られて

大打撃を受けてきたのです。

でも

今回は見事でした。

今までで

一番よかったかも知れないわよ。」

大明神は目を細めて

ほめ讃えた。

中納言はどんなもんだ、

と鼻を膨らませて

得意げに胸を反らせた。

「あんな奴ら、

たいしたことはありません。

俺達が出て行けば

ひとひねりです。

ちよろいもんですよ。

そんじょそこらの狐とは

訳が違うんだから。

我々は特別なんだ。」

へらへらと

浮わついた感じで

自惚れて言った。

その途端、

中納言の体が

フツと

消えた。

あっ、

と見ると

中納言の体がストーンと沈んで、

両目を見開いて

キョロキョロ

目玉を動かしている頭だけが

雲の上に出ていた。

「ほらほら、

有頂天になると体が重くなって

雲の底が抜けるって

言ってるでしょう。」

大明神が笑いながら

呆れたように言って、

襟えりを掴んで引き上げた。

中納言は手と足を縮こませて

情けない顔で

大明神の手にぶら下がった。

大明神が手を離すと

バツが悪そうに

シヨボンと

塩らしく肩をすぼめて

静かになった。

中納言の背丈が

縮んだように見えたのは

雲の底が抜けかかって

少しずつ

めり込んでいたのだろう。

有頂天にならないようにと

無理に抑えても

心の動きは止められず、

意に反して

有頂天になってしまふものなのだ。

「もう大丈夫です。

あの場所は

二度と侵入出来ないように

バリアーを張っておきましたよ。」

大明神はニコニコと

楽しそうに笑いながら

涼しい顔で言った。

まったく困っている様子は感じられない。

まるで

侵入されたことを

楽しんでいるようだ。

無踏は意外な想いで

大明神の顔を見つめた。

「あの場所にはね。」

大昔から、

あるところに繋がっている

通路があったのよ。」

大明神は

母親が子供達に話しかけるように

砕けた口調で言った。

えっ、

通路があったのか。

無踏はその話し振りに

以前から知っているよつな

懐かしさを覚えながら思った。

「あるところって、」

どこに繋がっているんですか。」

沈んでいた中納言が

好奇心をみなぎらせ、

興味津々の目を

大明神に向けて尋ねた。

「それはね、」

とっっても恐ろしい所なの。

どういう所か知りたければ、

今度連れて行ってあげるわよ。」

大明神は

悪戯っぽい目をして言った。

「えっ」

二匹の狐は息を呑んで

目を丸くしたまま

黙ってしまった。

そして

それ以上は誰も

その話に触れようとはしなかった。

大明神は可笑しくて堪らない様子で

無踏に顔を向けながら

「この雲は

意識がある程度の

レベルになっていないと

乗ることが出来ないんです。」

と言った。

無踏はそれを聞くと

急に不安になった。

それまでは

何の疑いも持たずに

乗っていたのだが。

自分にはたして

本当に大丈夫なのか。

そのレベルに達している

というのは間違いないのか。

自分自身を疑う想いに

気持ちが揺らいだ。

突然

自分が中納言のように

有頂天になって

止められなくなったら、

完全に雲の底が抜けるだろう。

そうなれば

下へまっ逆さまだ。

どうしよう。

不安で無踏の意識が混乱した。

すると

それを見ていた大明神は

「あなたは大丈夫ですよ。

心配ありません。」

にこやかに微笑んだ目で言った。

それを聞いて

無踏は少しホツとした。

雲が高速で飛んでいるために、

いつの間にか

相当の距離を移動したのだろう。

遙か前方に

高い城壁のようなものが見えてきた

と思う間に

雲はどんどん近づいて行く。

そして

門が瞬く間に巨大になって、

その前に到着した。

すると

大扉が両方に

ゆっくり開いて

「お帰りなさいませ、

どこからともなく

声が聞こえてくる。

「ご苦労様」

大明神が優しい声で言つと、

門が一層光り輝いて

嬉しそうに揺れた。

一行が通り抜けると

門がスーッと閉まった。

門にも意識があつて

大明神の波動を認識して

動いているらしい。

中に入ると

広い大通りが

まっすぐに通って

先のほうに宮殿が見えている。

道は碁盤の目のように規則正しく

縦横に通って、

その両側に家が建ち並んで、

荷物を担いだ狐や

荷車を引いている狐が溢れて

往来は賑やかだ。

雲は街の上空を通り抜けると、

そのまま

宮殿の入口に着いた。

門は閉ざされているが

雲は構わず進んで行く。

あっ、

ぶつかる。

と思ったとき

扉がスツと消えた。

そのまま雲が通り抜けて行く。

後ろを振り向くと

扉は再び閉ざされていた。

「お帰りなさいませー」

広間にいた全員から

一斉に声が上がった。

「ご苦労様」

大明神が一同を見回して

にこやかに声をかけた。

雲は大広間に入ると

蒸発するように消えた。

すると

無踏がそこにただ立っているだけで

宮殿の中の景色が変わっていく。

何もしないのに

勝手に

動いて進んで行く方向が

こちらに向かって来るのだ。

空間が

自由自在に移動し変形する。

不思議な音楽が聞こえている。

美しい着物を着た人や

狐が会釈をしてすれちがう。

「ここでは狐も着物を着ているのか。」

と無踏は思っ

と二匹の狐を見ると

いつの間にか

朱や青の生地

に金や銀の糸を縫い込んで

大きな丸い柄がらの

模様が入った服を着て、

腰には直刀をさした

威厳のある

立派な姿になっていた。

そのまま景色が変わって

ホールのようなところへ入って行った。

そこには舞台のようなものがあって、

その前には

テーブルと椅子がならべてある。

無踏は

中央の一番前のテーブルへ

座るように促された。

すると、

空いていたテーブルに

人や狐が 次々に現れて、

それぞれが

きらびやかな服を着て座っている。

大納言は

皆が揃ったところを見計らって、

口を開いた。

「皆様、

無踏様歓迎会に

ようこそお越しいただきました。

ありがとうございます。

本日は

稻荷大明神様も

お出まし下さいます。」

大納言狐は

ひと呼吸おいて、

大明神の気配を

伺っていたのであろうか、

颯爽さつさつと声の調子しずを上げて

「それでは皆様、

大明神様の

御なりでございませう」

「うおー」

会場が騒然として

拍手が鳴り響いて

大明神が舞台に現れた。

大明神は

にこやかに客席を見回してから

「本日は

無踏一郎氏への感謝と

お祝いの宴うたげを

催もしたいと思ひます。

お祝いとは

無踏氏が

観音力の能力に目覚め始めた

ということについてです。

まだ完全ではありませんが、

私たちも協力させていただきましよう。

それでは

存分に楽しんでください。」

大明神は非常に気さくで

終始にこやかで

みんなに気を使っている。

笛の音が鳴り響いて、

舞台では

着飾った狐の楽団が演奏を始めた。

笛、琵琶、ひちりき、

太鼓、鼓つづみが織りなす

霊界の響きは

いままでに聞いたことがないほど、

音色に深みがあつて

素晴らしく、

異次元空間の広がり

意識の中に

現れてくるようだった。

会場は和やかな雰囲気にもまれて

会話も弾んでいた。

無踏のところに

狐の給仕達が次々に

料理の皿を運んで来る。

皿の上の料理は

光りを放っていて、

口に入れると

スーッと

溶けて

口の中いっぱい

味が広がると、

気が遠くなるほど

脳神経が痺れて

幸せな気持と安心感に

満たされる。

いくら食べても

一口づつ味が

微妙に変わっていて

飽きることがなかった。

これは料理の光りの波動が

舌の神経に作用して

脳神経から

魂に伝達されて

魂で味わっているのだろうと

無踏は思った。

これは

肉体の舌だけで

感じる味ではない気がした。

そのうち、

食べている途中に席を立って

無踏のところへ

挨拶にやって来る人や

狐が増えて来て、

無踏はその対応に追われて

料理を味わうことが

出来なくなってきた。

挨拶にくる者は口々に

測候所のことや

渋谷でのことを話題にだして、

そのことに付いて

見ていたようによく知っていた。

怪訝けげんに思っ

そのうちのひとりに尋ねてみると

「私たちは

あなた様と

いつも一緒にいるのです。

これからも

あなた様をお助けするように

神仏から申し受けております。」

「私といままで

ずっと一緒にいたなんて」

無踏にとって初耳で信じられず

しばらく考えに浸っていた。

すると突然、

稲荷大明神が

無踏のテーブルに現れて

静かに座った。

そして

じっと

無踏の顔を見ながら話し始めた。

「たとえば、

稲が実るために

大地が無ければならないように、

すべてのものが実るためには

大地によって

育まねければなりません。

人には人間世界という大地があり、

霊界という大地があり、

地球という大地があります。

その地球には

宇宙という大地があり、

ひとはそれぞれの大地から

養分を吸い上げて、

人生という花を咲かせます。

そして同時に

他の人の大地になっている。

それを知ることによって

観音力の大地の力を使うことが

出来るようになるのです。

あなたはまだ

完全に

その力を使いこなせてはいませんが、

気付くことで

力は増して行くでしょう。」

私はハツとした。

そういわれてみればそうだ。

人間も植物と同じだったんだ。

人間世界という大地から

食物、お金、

教育、文化というように

様々な養分をもらって生きている。

人間ひとりひとりが大地であり、

その大地から養分をもらっている。

一人では生きることが出来ない、

全体があつて

生きているのだと思った。

無踏もその言葉で

何かに気付いたようだった。

稲荷大明神は微笑んで

無踏の意識の動きを

見ていたようだったが

「そろそろ

お別れの時間が来たようね。

健闘を祈りますよ。」

と言つと

大明神の姿が徐々に薄れて、

かすかな残像とともに

消えていった。

すると

瞬く間に

すべてが消滅して、

無踏の体は空間を飛んでいた。

「あなた、

「飯よ。」

早く下りて来て。」

遠くのほうで

妻の声かしている。

すると

下に自分の体があつて、

そこへ

入ろうとしている

別の自分がいた。

知らないうちに

幽体離脱ゆうたいりだつしていたのだろうか。

渋谷まで行ったのは

肉体ではなかったのか。

無踏は

まだ自分自身を

コントロールするということが

よくわかっていなかったのだ。

第23話 沢山良一（前書き）

編集済みでした。

第23話 沢山良一

それから

しばらく経った

五月半ばの週末、

昼を過ぎたころに

優子の幼なじみの

神林サエが訪ねて来た。

短くカットした髪が

ほほの下あたりで

内側に

カールしている。

細身で

黒縁のメガネが

よく似合う

二十代の女性だ。

擦^すれて色の褪^あせた

黒いジーンズをはいて、

ウォーキングシューズに

白いブラウスと

黒のカーディガン姿で

玄関を入って来た。

派手さはないが

西東大学を出て

三丸商事に勤めている。

まだ独身。

ソファーに腰を下ろして、

サエが持って来たケーキを

食べながら、

女性二人が

雑談に夢中になっているのを

無踏が脇で

聞くともなしに

聞いていた。

「やっぱり

この店のモンブランは

美味しいわね。

でも

なかなか

買えないって

聞いてるけど。」

おしげもなく

たっぷり盛り上げてある

栗餡を

フォークでちぎって

口に運びながら

優子が言った。

「そうなの。」

「すぐ売り切れちゃうんだ。」

サエがひと口飲んで

コーヒーカップを

皿に戻しながら言った。

「じゃあ

買うのが

大変だったんじゃない。

朝早くから並なんだんでしょう。」

優子が

申し訳なさをそうに言った。

「うううん、

そんなことないよ。

午前中に行けば買えるから。」

こともなげに言った。

そして

「そうそう、

このあいだ

理沙と会ったんだ。」

サエが

思いついたように言った。

優子が

フォークを口に運びながら

サエを見た。

「理沙の旦那さんて

研究に夢中で

理沙に付き合ってくれる暇も

ないんだって。

暇もないって言うか、

歳も離れてるし、

理沙と話すことに

興味がないんじゃないのかな。

研究のほうが一番面白くて

楽しいんでしょうから。

玉の輿^{こし}だけど、

ちょっと寂しいね。

でも生活は安泰だから

贅^{ぜい}沢は言えないけど。」

理沙の夫は

工科大学の

大学院教授の冴木信三だ。

「そしたらさ。」

理沙が

急に話題を変えた。

「綾香の旦那さん、

このあいだから

変になっちゃったらしいって

言っのよ。」

「えっ、どっしで。」

変という言葉聞いて

一瞬

優子は

信三が夢遊病者のように

徘徊はいかいしている様を

想像した。

「綾香の旦那さん

貿易会社の社長で、

海外出張に行ったんだって。

そして帰って来たら、

すごく性格が変わって、

まるで

別人みたいに

なっちゃったんだってさ。」

サエが

声を落として言った。

理沙と綾香は

優子とサエの

中学校時代からの親友だ。

「出張つてどこへ。」

優子が

怪訝けげんな顔で聞いた。

「メキシコらしいよ。」

アステカとかの

遺跡いせきのあるところだって

言ってた。」

サエが言った。

アステカの遺跡と

綾香の主人の性格が

変わってしまった

ということを知って

無踏は興味を引いた。

様子が変だといっても、

どの程度なのか、

綾香が困っているのではないか。

心配な気もした。

二人の会話の

途切れたところで

「一度様子を見に

行ってみようか。」

無踏が提案した。

「そうね、

どついう状態なんだか

見に行ったほうが

いいかもね。」

優子も気になるらしく

同意した。

結局

サエも一緒に行くことになった。

一週間後、

ファミリーレストランで

待ち合わせて

三人で昼食を済ませた後、

綾香の家に向かった。

綾香の家は

高台の高級住宅街の一画にあつて、

鉄筋コンクリート

二階建ての

大きな家だった。

入り口の脇に

何台か止められる

ガレージがあり

外国の高級車が

一台入っている。

主人はかなりの

高給取りなのだろう。

表札には

沢山良一と書いてあった。

優子が

門のチャイムを鳴らした。

しばらくすると

玄関が開いて、

ふっくらした丸顔に

髪をアップにして

頭頂でまとめ、

薄紫の地に

白牡丹柄の着物を

洋服に仕立て直して、

グレーの

ゆったりした

スラックスをはいた

綾香が門まで出て来て

三人を迎え入れた。

入ってすぐ庭になっている。

牡丹ぼたんや芍薬しやくやく

皐月あきづきが咲き揃い、

仕切られた向こう側に

薔薇びばいが見える。

手入れがよく行き届いて、

スツキリと

まとまった庭だ。

「この庭は全部綾香が作ってるの。」

優子が庭を見て聞いた。

「そうよ。」

手伝ってくれる人が

誰もいないんだもの。

自分でやるしかないのよ。」

聞かれた綾香が

おどけた感じで

得意げに答えた。

「えー、そうなの。

信じられない。

大変でしょう。」

サエが声を上げた。

「そうね。」

でも

それほどでもないわよ。

庭いじりは楽しいから。」

綾香が笑いながら言った。

しばらく

庭先で立ち話した後、

綾香に促^{つな}されて

家の中に入った。

真ん中に廊下が通って

両側に部屋が並んでいる。

玄関から上がって、

すぐ右側のドアが開いていた。

そこは広い応接間で、

絨毯じゅうたんを敷き詰めた上に

白いレザー張りのソファアが

丸いテーブルを中にして

ぐるっと円形に置かれている。

そこに綾香の主人の

良一りゅういちが座まっていた。

三人が入って来たのに気付くと

良一は立ち上がった

「ヤ、ヤ、ヤ。」

さあ、

どうぞおかけ下さい。」

如才なく

にこやかに言っ

座を進めた。

性格が変わってしまった

と聞いていた三人は

拍子抜けして

良一を見つめた。

「全然変じゃないよね。」

サエが優子の耳元に

顔を寄せて

小声で言った。

「うん、なんだかね。」

優子も小声で言葉を濁した。

「ああああ、」

みんな座ってちょうだい。」

綾香が

お茶と茶菓子を持って来て、

ソファの前の

テーブルに置いた。

サエは自分の聞いた話しが

間違っていたのではないかと、

訝いぶかりながら

良一の顔を窺うかがった。

しかし、

じろじろ見る訳にもいかず、

綾香が入れてくれた

お茶を飲みながら、

何喰わぬ顔で

良一を観察していた。

話が弾んで楽かったが、

良一のこととは

聞きづらかった。

気兼ねして

そのことに触れないように

話題を選んでいた。

それぞれの苦労話や

思い出話しが

次々出て来て

話題は尽きなかった。

すると、

やおら良一が

インカ帝国や

マヤ帝国、アステカ帝国の

遺跡いせきの話しをしだした。

一瞬

その場が

止まったような気がした。

話題にすることを

ためらってはいたが、

良一から

それに触れてくるとは

好都合だった。

触れてみたくて

ウズウズしていた欲求が

全身を耳にした。

組んだ石にカミソリ刃の

入る隙間すきまもないとか

一年に一度、

石段に蛇の姿が

浮かび上がるときがあつて、

ピラミッドがある

ところもある、

といったような話しが

出てきて、

興味深かった。

しかし、

良一の性格が

変になるほどの

危ない事件に

巻き込まれた話しが

出て来るのではないかと

期待して聞いていた三人は

拍子抜けした。

いつまで経っても

それらしいものは

出て来なかった。

あっという間に

時間が過ぎていた。

気がつくと、

陽が傾いて、

西の空が

茜色あかねいろに

染まり始めた。

そろそろ

暇を乞う時間かなと

思ったときだった。

突然、

予期せぬ大声が

聞こえて来た。

何事かとばかり

いつせいに良一を見た。

「御神託が下ったのである。

だれぞおらぬか。」

話していた良一が

突然、

訳のわからないことを

口走りだした。

威厳いげんに満ちた

力のこもった声が

部屋中に響き渡った。

何が起きたのか。

啞然として

全員が目が

良一に釘付けになった。

「なぜ誰も答えぬ。

いけにえはまだか。」

焦点の定まらない

虚ろな瞳は

周りに

人がいることに

気づかないのだろうか。

懸命に誰かを探している。

「いますぐ、

太陽神に

人の血と心臓と

命を送るのだ。

いけにえとなつて

太陽神に命を送つた者は

太陽神となつて生き、

太陽神として

敬つやまわれるのだ。

志願しがんせよ。

太陽神を生き返らせ、

太陽神の寿命を

延ばすために

自ら志願して

名乗り出よ。」

良一は

まったく

ひとが変わってしまって、

大衆に訴えかけるように

呼びかけていた。

良一の背後に何かがいる。

無踏は

その気配を感じて

意識を凝らした。

すると、

フードの付きの

裾すその長い服を着た

神官のような霊が

良一の意識に

食い込んで

支配しているのが

見えてきた。

不意に、

その神官の意識から

映像が投影とっせいされだした。

寝台しんだいの上で

眠りに入ろうとしている

神官の意識のなかにも、

やはり何者かの

波動が入り込もうと

しているようだった。

それは覚さられないように

侵入して来る。

神官本人は

全く異変に

気づいていない。

彼は床についても

なかなか

寝つけない日々を

送っていた。

寝よつとすると

幻聴と幻覚が

襲って来て

寝られないのだ。

来る日も来る日も

夜になると

それが始まる。

「太陽神の寿命が

尽つきようとしている。

寿命を延ばすことが出来るのは

そなただけだ。

いまそなたが

動かなければ

世界はすべて

闇の中に飲み込まれ

死んでいく。

生け贄をもっと増やせ。

多ければ多いほどいい。

はやく太陽神と大地の神に

人間の血と心臓と命を

送るのだ。

今を逃したら最後、

取り返しがつかない。

見よ。
「

太陽神が

分厚い真つ黒な雲に

埋め尽くされ、

いまにも

息絶えだえの様子で

苦しそうに

グラグラと

揺らぎながら

瀕死の状態になり、

輝きが消えて行く。

あたりは暗くなって

真の闇が

世界を支配した。

気温は急速に

下がっていった

作物は凍りつき、

人や動物達は

凍死していく。

なんどもなんども

繰り返し

執拗しつように

現れてくる悪夢に

悩なやまされて

寝むれない日が

続いていた。

これは

どういふことなのだ。

予言なのか。

すると

突然

映像の場面が変わった。

第24話 最高神官（前書き）

編集済みでした。

第24話 最高神官

「どうしたらいいんだ。」

最高神官は

頭の中が混乱していた。

神の怒りだ。

完全に

神を怒らせてしまった。

あれだけ

生け贄を捧げたというのに。

我が国には災いを

及ぼさないだろうと

信じていたのだが、

神は何故、なぜ

このような

罰を我々に与えるのか。

自分が行った祀りまつ方が

神の意にそぐわなかった

ということなのか。

このままでは

最高神官である

自分への信頼は

地に墮ちてしまう。

こじで

手をこまねいていれば、

権力の座を

狙っている奴らの

格好の餌食だ。

祭司の真心まごころが

神に届かなかつた怠慢たいまんの

責任を追及され、

自分が生け贄にえにされかねない。

最高神官は

他人を生け贄にえにすることには

痛みは感じていなかった。

というよりむしろ

残虐さに打ち震えて

狂喜で踊り狂うほどの

強烈な快感を

感じていたのだ。

ところが、

いざ自分が

生け贄にされて

黒曜石のナイフで

胸を斬り裂かれ、

生皮を剥はがれることを思うと

気味悪さで

全身にゾツと鳥肌が立った。

それだけは

なにがなんでも

避けなければならぬ。

この国、カボトバン王国の

国王カムシュリの

残虐さは

国内はおろか

周辺国にも知れ渡っていた。

それ故、

誰かが

この事態の責任追及を

国王に進言でもしよつものなら

私の命はない。

最高神官は

様々な想いが

心の中を駆け巡って

穏やかではいらなかった。

「テミクシ様」

扉の外で声がした。

「入れ。」

テミクシと呼ばれた

この最高神官が答えた。

すると

頭に被物と

石の胸飾りをつけ、

耳に大きなイヤリング、

腕と足に飾りを付け、

サンダルを履いて

赤と茶と黄色の

幾何学的な柄を

編み込んだ

裾のながい服を着た

神官のパチャクが

入って来て

最高神官の前に

ひざまづいた。

テミクシは頭に

宝石の並んだ

革ベルトのようなものを

巻いているが、

その下に

柔らかくなめした革を

被^{かぶ}っていて、

それが頭の後ろに広がって

垂れ下がっている。

その革の縁ふちに

人の手や足の形を

したものが

付いている。

それは

人間の皮だったのだ。

そしてやはり

青と赤の幾何学的な柄の

裾の長い服を着て

鷲わじの形を模した

フードを被り、

耳に大きな

イヤリングを付け、

カッと

飛びだすほど

大きく見開いた

瞬まはたきをしない

狂った目を

パチャクに向けて

「どんな様子だ。」

とテミクシが尋ねた。

「はっ、

コスカル様が

不審な動きをしています。

側近のセンチャコが

国王に影響力のある

王公貴族達のところへ

頻ひんぱんに

出入りして

何やら根回しを

しているようです。」

やはり狂気で

見開いた目の

パチャクが

あたりを憚^{はまか}って

声を潜ませた。

コスカルというのは

テミクシの一族と同様、

代々神官を出している貴族だが、

お互い事あるごとに

権力闘争を

繰り返していた。

「やはりそうか。

思った通りだ。

あいつを

始末しておかなかつたのが

間違いだった。」

テミクシは一瞬

表情が動いたが、

すぐに

無表情な顔に戻った。

テミクシは

コスカルが

自分を

落とし入れるのではないかと

いつも疑っていた。

そこで

今回も

すぐパチャクに命じて

密かに

コスカルの動きを

探らせていたのだ。

パチャクを下がらせたあと、

テミクシは

コスカルの策謀さくぼうを

阻止そしする方法を

模索もさくし始めた。

自分が生け贄なげにされる。

それだけは

避けなければならぬ。

やられる前に

先手を打たなければ。

それにしても

私のどこがいけなかったと

いうのか。

生け贄を

怠ったことが

あっただろうか。

思い返してみたが

生け贄を

増やすことはあっても

減らしたことは

断じてなかったはずだ。

ここ数年間、

凶作が続いて、

太陽神が弱っているのは

感じていた。

そこで

太陽神トナティウと

大地と水の神アトラトナンへの

生け贄の数を

二倍に増やしたのだが、

それでも

事態はよくならなかった。

これでもまだ

足りないのだろうと

いうことで

これ以上増やそうとしたが

生け贄の数が

追いつかなくなってしまった。

それで

近隣の部族に言いがかりをつけて

戦^{いくみ}を仕掛け、

生け贄としての

捕虜を確保しようとしていた。

その矢先の

この天変地異だった。

やはり太陽神や

大地の神の命を

永^{なが}らえさせるには

生け贄の命が

不足だったのだろう。

生け贄が足りなかったのだ。

神が完全に怒っている。

大変なことになってしまった。

太陽は姿を見せず、

ただ真っ黒な

分厚い雲を通して

薄暗い世界と

闇の暗黒世界が

交互に入れ替わりながら

一日が過ぎて行く。

いったいこの世は

どうなってしまったのだろう。

神の怒りだという

噂ばかりで、

正確な情報は

まったく掴めなかった。

かなりの高地なのだが

見渡す限り

海原が広がっている。

被害がどのくらいなのか、

世界は滅亡したのか。

下の地域への交通が

遮断されて

孤立したままで、

不安だけが増していった。

思い起こせば、

こんなことになる

だいぶ以前から

地震が頻発し、

多くの火山が

連鎖反応のように

次々噴火を

繰り返していた。

それは漠然と

不吉な予感として、

すべての国民が

感じてはいたが、

これが果たして

どうなっていくのか

ということまでは

まったく

理解出来ていなかった。

しかし、

それが

突如として

やって来た。

ドオーツと

地鳴りがしたかと思うと

突然地面が盛り上がった。

あっ、

と思った途端、

大地が篩ふるいにかけられたように

大きく波打って

激しく揺さぶられ、

バツと

地面が

広範囲に割れて

口をあけた。

いつもの地震とは違う。

山も崩れるかというほどの

巨大な激震が

長い時間続いた。

その後

大きな余震が

頻発していたが、

どのくらい経っただろうか、

やっと

揺れが落ち着いたころ、

人々が何やら

東の方角を指差しながら

騒ぎ出した。

はるか彼方かなたの地平線に

水煙りが

靄もやのように広がって、

巨大な山のように

盛り上がったものが

地平線全体に広がって

こちらに突き進んで来る。

「何だあれは。」

「どんどん近づいて来るぞ。」

「山か。」

「いや、違う。水だ。」

「水の神の怒りだ。」

高い山に住んでいる部族にとって

津波などというものは

理解出来ない。

それはものすごいスピードと

海の水全体かと

思うほどの水量で

すべてを巻き込み

破壊しながら

押し寄せて来る。

そしてそれが

近づいて来たとき

人々は恐れおののいた。

これだけ高い山の

上のほうにいるといつの

津波は

山をも飲み込むほどの

高さで襲い掛かってきた。

「逃げる。」

「来るぞ。」

人々は先を争って

山の上に向け上がった。

そのうち

瞬く間に

暗雲が全天を覆って、

今まで

すぐ下に見えていた

山々までもが

水の底に沈んでしまった。

第25話 天変地異

しかし

盆地に築きずかれた

都市の人々は

予想もしていないところから

大量の水が出て来たことに

驚愕きょうがくした。

地震で破壊されたところへ、

来るはずもない津波が、

思ってもみない

山から落ちて来たのだ。

何が起きたのか。

人々は高台に逃げようと

必死で走った。

しかし

運河に渡された橋は

ほとんどが

落ちていた。

そして

そこへ

山のような津波が

運河を埋め尽くすように

盛り上がった

突進して来た。

「神が怒っている。」

「神を怒らせた。」

神々がこれほど怒るとは

よほどのことが

あったに違いない。

人々は恐れおののいた。

あれほど

生け贄を捧げたのに

どうしたことがか。

神の機嫌を損ねたのは

一体誰なんだ。

何に怒ったのだ。

生け贄の中に

気に入らない者がいたのか、

それとも

神官のやり方に

問題があつたのか。

命からがら

危機一髪で

生き残つた人々は

海水が巻き込んで

破壊した瓦礫の山を

前にして

持って行きどころのない

怒りと

日頃虐げられて

生殺与奪をせいさつよみだし

欲いままにされ、

押さえつけられてきた

鬱憤がうつげん

強い怒りとなって

噴出した。

地震と津波の後、

余震がいつまでも

続いている。

こうなってしまった

神の怒りは

最高神官である

自分のせいに

されるかも

知れないのだ。

テミクシは

責任を逃れる

方法はないかと

考えていた。

死んでも

すぐに生き返る

という思想は

子供の頃から

教え込まれているために

死ぬことは

恐ろしくなかったが、

生け贄にされて

黒曜石のナイフで

胸を裂かれ、

断末魔の

呻うめきを上げて

息絶えるのは

屈辱感と恐怖感で

生きた心地が

しなかった。

これだけは

なんとしても

避けなければならぬと

思った。

しかし

自己犠牲が

美德とされている以上

生け贄に選ばれたら

断ることは出来ない。

もし

それを恐怖して

逃げでもすれば

国民全体から

非難を受けて、

この国で生きて行くことは

出来なくなる。

どうしたらいいのだ。

テミクシは必死に

知恵を絞った。

幾度も幾度も

考えが堂々巡りした後、

責任を追及されないように

するためには

国王に

余計なことを

考えさせなければ

いいのだと思い至った。

国王が

テミクシの不手際に

目を向ける前に

大量の生け贄を

自分が主導して

太陽神、水の神、山の神、大地の神に

捧げることだと思った。

太陽神は

命が弱ってしまったのか、

まだ

厚い雲に覆われたまま

姿をあらわさない。

取りあえず

早く生け贄の命を捧げて、

太陽神を

生き返らせることが

先決だった。

この闇を

テミクシが被^はつて見せれば

それが手柄になるだろう。

それを責任追及の前に

成し遂げれば

テミクシの罪は

免れるはずだ。

そのためには

未だかつて

無かったほどの規模で

大々的に

生け贄を捧げる儀式を

執り行^とう必要があつた。

規模が小さければ

神々は

許してはくれないだろう。

「さっそく

国王に奏上^{しうじやう}して

生け贄を集めよう。」

まだ余震が続いて

水が引く様子は

なかったが、

すぐに

配下のアデルコを呼んだ。

「緊急事態だ。

宮殿に行つて

国王陛下の安否を

確認してくれ。

そして

すぐに生け贄を

多数必要としていることを

申し上げて来てくれ。」

テミクシは無を言わさぬ

強引さで言った。

「テミクシ様、

まだ水が引いておりません。

この状態では

宮殿に行くことが

出来ないと

思われますが。」

アデルコは

何でこのような状況の時に

テミクシが

このようなことを

言い出すのかと

不満に思った。

しかし

専制国家では

これ以上の反論は

出来ない。

「何をぐずぐず申してやる。」

すぐに

生け贄を

捧げなければ

ならないのだ。

どのような

手段を使っても

国王陛下に

お伝えするのだ。

いますぐにだ。」

気温が下がり、

このところ

雪が降り続けている。

アデルコは

厚手の服を

羽織って

仕方なく外へ出た。

水は

だいぶ引いてきたが

まだ深い。

数人の人足を連れて

丸木舟に乗ると

漕ぎ出した。

山のように

積み上げられた

瓦礫が行く手を阻む。

津波に吞まれた

マンモスや恐竜の死骸が

その中に

多数見えて

異臭を放っていた。

それを

避けながら

進んで行く。

神殿にも

被害はあつたが

完全に崩れては

いなかった。

しかし

石造りの都市の

ほとんどは

壊滅状態になっていた。

そして

物流が止まり

国中が飢餓状態に

なっていた。

食べるものが

なくなったとき、

人間は人間で

いられなくなる。

肉体は

生き残るために

手段を選ばない。

そうになると

奪い合いが始まる。

そのため

どこへ行っても

危険な人間で

溢^{あふ}れて来ていた。

道路は寸断され

物流は止まり、

国の生産活動再開のめどは

まったく立っていない。

人々は

飢えに耐え兼ねて

食物を探し回っていた。

生き残ったマンモスや恐竜は

格好の餌食となり、

人々は先を争って

奪いあう。

アデルコは

油断なく

辺りを警戒しながら

舟を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802f/>

白道寺（霊界ゲリラ隊）

2012年1月2日23時52分発行